

明治三十三年九月十三日 起首

明治三十三年九月十四日 發送

明治三十三年九月十三日 檢閲

要旨付了

17

支人望

整

支人望

西園寺

機密

支人望

外務省

支人望

支人望

支人望

支人望

支人望

支人望

山は張家口所 北平府
 鐵振事 諸大キニテ 通共ニリハ際
 四得等より 示不取行、指置、ノ、手
 ナルキヲ、示示能事、感謝、多
 事、夫、右、升、右、既、三、九、事、等、等、
 義、一、存、升、一、為、金、成、派、升、等、又
 鉄道沿線三十英里内、鞍山採掘坑
 外務省
 同シテ、一、當、存、ニ、お、テ、之、キ、ヲ、一、百、百、之、約
 一、五、等、ヲ、下、手、不、取、升、一、共、北、豆、倉、後、ノ
 新、製、機、械、ヲ、沿、線、三、十、英、里、お、シ、
 自、一、鐵、山、の、如、ク、一、二、大、キ、ヤ、砂、金、ノ、採、取、
 一、規、定、ヲ、リ、テ、一、ニ、在、在、鉄、道、沿、線、中、ニ、
 見、出、カ、ル、旨、ヲ、述、一、之、ニ、依、リ、少、許、買、入、リ、
 其、採、取、機、械、等、ヲ、採、取、シ、ル、ニ、關、シ、
 其、採、取、機、械、等、ヲ、採、取、シ、ル、ニ、關、シ、

東省鑛路合同載開出礦苗另議
 辦法並無准俄人在鑛路附近三十
 里內開採煤礦明文開辦外務部
 光緒二十七年奏明以附近鑛路三
 十里為限並聲明三十里以外無論
 何人開採該公司不得與聞

外務省

關東都督府
受第一七七三
書政務局
山

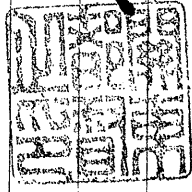
大
臣
名

山ノ
物ノ
取
得

關東都督府 第六一六 號
南洋洲鉄道附近 鑛業取調ノ件ニ付御出會ノ趣ヲ奉
右ハ三十七八兩年度ニ至リ調査報告ハ既ニ陸軍省
ハ呈出致シ置キ候モ尙調査後帝國臣民ニシテ戰時
中ヨリ鑛業ニ從事シツアルモノハ調査ノ上御報告可致
候事此段及甲各取也
明治三十四年四月十日

關東都督府 男爵 大嶋 義 長

外務大臣 子爵 林 正 樹



關東都督府

明治三十九年十月十一日

明治三十九年十月十一日
川村 日野
日野

了
104

孝内 陸軍大臣
林 大臣

南内 鉄道附近 鎮業 園之

報告書 呈請 束ノ

外務省

景 木島 園 陸軍 部 督 府 園 之

及 以 之 知 悉 三十七八兩 年 迄

ニ 互リ 調査 之 夕ニ 南内 海 陸 運 送

附近 鎮業 之 業 之 美 之 以 報 各 書

写 一 部 以 送 付 之 煩 之 及 之

以 之 送 付 之 煩 之 及 之 送 付 之 煩 之 及 之

以 之 送 付 之 煩 之 及 之 送 付 之 煩 之 及 之

山ノ 一 報 務

第一二二二號

北滿洲に於ける撫順炭、取跡、
関スル件

我撫順炭、北滿洲露國、勢力範圍に於ける
取跡、関、今回北方旅行、際注意研究致
去處、素より僅日敷、旅行、確然タル調査
の遂々タル、無之を得其寛城子に於ける既電ノ
如く露國、採掘、係ル陶家也、石牌嶺ニ
之炭坑アリ炭質我撫順炭、比之遙ニ劣等、
有之を得其日々輕便鉄道及馬力に依り若干
量、石炭ヲ傳、運搬致、付、付、
發、必要ナル燃料トシ、他、供給ヲ仰、
在外公館

要無之其他松花江ヲ經由シタル小白山、材木
供給潤澤ナル為ノ該地、於ける燃料、大多
量、木材ノ以テ之、充當致、付、付、
炭ヲ該地方、供給スル、格、外、低價、高買、
アラレハ到底、常用者無之見積、
春、北方哈爾濱着、
潤澤、有之既電陶家及哈爾濱着、外、露
國、陶類、北方十數里、地点、松花江、支流
ヲ利用シ、材木供給、
設、
及滿洲各驛、
他、石炭、多量、

手書

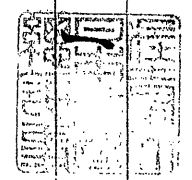
2255

湖亭ノ低價ヲ以テ製粉廠其外ノ製造場
 ニ供給セシ居リマシ付少クモ本冬より米價ニ掛
 テ我撫順炭供給ノ餘地無キ見込有之矣則
 我撫順炭ニシテ米價ノ復期以前ニ歐路ヲ清國
 市ニ運搬シ運シマシ時先以テ關外鉄道及
 北清地方ノ需用ニ充ツルカ又ハ海路南清方面
 輸出スル外餘地無キト見解ヲ懷キマシ
 右ノ参考迄ニ及報去々敬具

明治三十九年十月廿四日

在奉天

総領事 荻原 兼



外務大臣子爵 林 董 殿

在外公館

明治三十九年十一月五日午後

管政務局

第一三四號

奉天將軍より千山堡(撫順)炭坑
採掘停止の申込ミタル件

奉天將軍、昨廿五日附公文より撫順炭坑、採
掘停止の本官に申込ミタル事、其來文の大意は
一、千山堡(撫順)撫順城南十餘里(清里)ニ
炭坑、総名ニシテ千金寨、楊白堡、老虎台ニ
合シ、東西長約十餘里、南北寬約五六里、地
域ニシテ本官有山野ナリ、清高王承堯等、
計畫ニ依リ奉天千山堡華興利煤礦
公司、名義、下ニ往來ノ將軍ノ廳、許シ可ク
得テ業務ヲ開始シタルモノナリ

在外公館

一、華興利煤礦公司ハ華子俄道勝銀行
(露清銀行)ノ持株者ナリ有スルモ華實露清
共同事業ニシテ殊ニ露清銀行ノ持株者
組入ル、件ハ本官北京外務部ニ允准ヲ經カ
ルモノナリ
一、右千山堡、炭坑ハ現ニ日本人、右有採掘スル
處トナリ居ルニ付滿洲ニ關スル日清協約(第一
四條)指スモノナリ)ニ依リ還附ヲ受ク可キ事
ナリ殊ニ往來ノ王承堯等開作ノ時、右ハ露
兵トシテ衝突アリタリト呈シ規定ニ依リ納税ノ
義務ヲ盡シタルニ日本人、右據以來既ニ一
年有年ニ至リ採掘停止ノ多クナリト呈シ直モ
納税トスル事無シ

2264

改訂

一前題、理由、依り現、外務部、在北系
帝國之使、提議中ナルモ其決定前、便法ト
シテ本誌領事ヲ、該處に據、日本軍隊及人
氏、シテ暫時傳工セシメ度シ

本官、右之文、対シテ、一、詳細、并駁スル事ヲ
避ケ、簡、左、意味、覆、度希望、其

撫順、辰、坑、露、清、間、成、立、シ、テ、東、清、鉄、道、會
社、續、約、第、四、條、基、其、他、南、滿、州、に、於、テ、ル

同、様、鐘、山、ト、共、結、核、的、株、権、ヲ、許、可、セ、ラ、レ、タ
ル、モ、ニ、シ、テ、既、貴、我、合、資、會、社、タル、南、滿、州、鉄

道、株、式、會、社、業、務、ノ、一、ト、シ、テ、勅、令、依、リ、テ、規
定、セ、ラ、レ、タル、第、一、貴、國、政、府、ヲ、知、セ、ラ、ル、由、ニ、シ、テ、

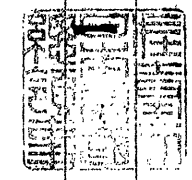
故、該、鐘、山、に、右、株、権、を、開、シ、申、身、方、ノ、思、議
在 外 公 館

ハ、最、早、考、量、ノ、限、リ、ア、ラ、ズ、從、テ、株、権、傳、止、モ
亦、應、諾、シ、進、シ、云、々

右、本、官、ノ、回、答、振、對、ス、ル、由、意、見、可、相、成、電、報
以、別、示、シ、想、ハ、レ、度、此、段、及、具、申、上、敬、具

明治三十九年十月廿六日
在 奉 天

總領事 萩 原 守



外務大臣子爵林 董 殿

明治 年 月 日
 同 月 日
 日 起 草
 日 發 遣
 主任
 林 和 邦



明治二十九年十一月十六日
 電話二七〇一

奉 命
 林 和 邦
 林 和 邦 啓

十月廿六日附機密二四号ニ送リ
 貴省ハ 該 處 玩ハ 貴 邦 何 人 三 許 可
 外 務 省

セシタリト云モ 數ヶ月前より 事實露
 馬ノニ於テ之ヲ 治 登 之 東 海 鐵 道 之
 利 便 ノ 為 採 掘 セシタルモノナラシテ 日
 露 及 日 清 條 約 之 條 々 貴 邦 主 事
 者 政 府 ノ 所 為 ニ 帰 シタルモノナリ 是 等
 採 掘 命 止 儀 貴 邦 之 方 々 希 望 之 意
 云々ト 誠ニ 貴 邦 之 方 々 希 望 之 意

之頃岩坑ニ置ル法多ク格利
法局全場之ヲ多視ル一能ハルヤ
モ辭解ニ或ハ後日方法ヲ立テ其
要ヲ海ニ送セシムル必要アリ
候ルカラス然レモ古ノ法ニ
之ヲ及ビテ後識ニ讓リ目下ノ
前記ノ趣旨ヲ以テ先方ニ
外務省
之旨

明治三十九年十一月二十二日 陸軍省

受第 二〇〇四三 號

明治三十九年十月十五日

關東都督府陸軍參謀長 森合三郎

外務次官 珍田 捨巳 殿

別紙 千金寨炭鑛還附ノ件ニ関ス
凡結末書甲乙丙丁戊 一通 御参考
ノ為メ及送附矣也

次
外

四十年十一月二十二日 陸軍省

陸

甲
千金塚炭礦還附請求件關於意見

本件關於千金塚炭礦會社經營ノ出炭礦下炭申請ニ關
ル件ト大體ニ於テ同キモ其ノ異ナル處ハ千金塚炭礦鐵道
トノ關係如何ニシテ梅煥炭礦會社ハ該支線ヲ以テ自己ノ敷設
セルモノナル從テ鐵道下炭礦トノ關係ハ甚ク密接ナルモノナルニ
千金塚炭礦ニ於テハ此ノ關係ヲ明クシテ其ノ證據書類ヲ欠ク然レモ
千金塚炭礦亦戰前前後全然鐵道ノ爲メニ供給
セラルルハ事實ニシテ此事事實ハ王承堯元々奉天將軍對シ
光緒三十年正月届出ル書類ニ依リテ明白ナルヲ以テ本件ニ關

シテモ亦此事事實ニ基キ梅煥炭礦會社ニ對スル處分ト同
様千金塚炭礦モ亦東清鐵道利益ノ爲メニ採掘セラル
處ヨリ日本帝國ハ日露條約及日清條約ニ基キ兩國ノ合意
ヲ以テ其權利ヲ獲得シタルモノニシテ日本政府ハ其還附ノ要
求ニ應ズルニ限リニアラハスト固ク之ヲ通過屬ト信ス

願書(大厚)
外國人遺留財産整理委員長

右様閣下

ポルトガル國臣民

メイナルド・ランジエ

願書

閣下 拙者ハ本願書ト共ニ露國臣民非職大佐ルビー
ノフヨリ與ハタル委任状ヲ提出致申候處ニ閣下ニ對シ
撫順炭坑ニ関スル本願書一併御詮議ヨク由候而
御詮議ノ結果右炭坑ノ私立會社所有ト御認
相成具今會社ノ代表者カ拙者ニ委任状ヲ與ヘ非職
大佐ルビーニ垂テ御認メ相成候上炭坑並ニ之ノ屬

總テノ財産ヲ拙者ニ御下渡シ被下候様殿ニ申候
閣下ニ於テ右炭坑並ニ其ノ屬財産ヲ拙者ニ御下渡シ
被下候ハ深謝致ス處ニ御座候 敬白

右

メイナルド・ランジエ

大連市 一九〇六年九月十三日

願書類

第一 在告公文露譯

第二 撫順炭坑組合規約譯文

第三 組合員相互間規約文

委任此証文(写)

ノエエルト、ヤコウレウイ、ニ殿(即チランジニ名ナリ)

奉天州ニ於テ撫順炭坑ノ私人株式會社ニ屬スルモノニテテ款
礦山ノ所有者ノ為メニ在設セラルル東清鐵道ノ分線ニテ
接續セル此礦山並ニ此線路ハ鐵道當局當時日本人ニテ
占領セラルリ國際公法並ニ西路國日本ノ例ニ締結セラル
ホーツニ條約ニヨリハ敵ノ為ニ占領セラルル地點ニ存在ス
私人ノ財産ハ犯スヘクニセラルル此理由ヨリ撫順炭坑並
ニ鐵道分線ハ其所有者ニ還附スルハモナリ前記炭
坑ノ代表者トシテ且撫順會社ヲ發行シタル五十株ノ
全株式ノ内個人ニテ五株ノ所有スルヨリ下名^蓋前記炭
坑鐵道ノ分線並ニテラニ不動産動産ノ日本官憲

ヨリ復領スルコトヲ貴下ニ委任ス此理由ヨリ下名^蓋下
向ヒ日露路清三國ノ法律ニ從ヒ請願書ヲ露月清法
府ニ呈出シテニ種類ノ必要ナル請願書及他ノ書
類ノ司法官省及司法官ニ提出シ該礦山所有者ノ利
益ヲ保護スルニ必要ナル方法行為ヲ取テ權能ノ所與
ス此委任狀ヨリ貴下カ為スベシ事ハ何事ニヨリ下名ノ
信用スル處ノモノナルヘリ決シテ之ニ向テ抗シテ居リ不
認スルコトナカレシ

在ハルビン外務省至務取扱ビニテハイサ夕ゴノ公
証記名附記セル

月附 千九百十六年七月三月

一過

添付書類並部號

詳文勝本

聖旨奉り奉天將軍各種官名爵位ヲ異ス増ハ左ノ通り告
諭ス

告諭

チヤン、シヤン、シイ地方ニ於テ石炭坑開始ノ許可ニ關シテ道世庫
候補トモ、シヨウノ知州候補トモ、シヨウノ及一官各略一ラ、チエシ
ヤオノ屢次ノ報告ニ基ツテ地方ノ踏査ニ付境域ノ外定、為メニ
官吏ヲ派遣セリ上記ノ官吏ハ甘肅省ニ在リ同地方
南北ニ貫流スル一カ河ノ境域ヲ劃テ河東ハウモ、シヨウノ作業
ニ屬シ河西ハウモ、チエシヤオニ屬スルコトヲ報告セリ

道官ノ方法ニ依リ開拓ニ關シテハ上記ノ人ノ及スル命友外チ
ニシテ、シヤンノ撫順、遼寧各官ニ對シテ注意スルノ點、地ニ隨時保
護ヲ加フルコトヲ命ズ又上巻ノ中ニ一般ニ告諭ヲ發スルモノトス
持ニ茲ニ該地方附近ノ住民一般ノ人等ニ向テ下記ノ事ヲ告諭ス
株鉦ノ開始ハ即チ信田等ノ開發ニシテ最モ現存ノ急務ニ屬ス故ニ
汝等位成始ニ善ヲ加ヘズ如斯ク信田等ノ地ニク自家ニ埋設セズ又
理由ナク動搖スルコトハ一衝突ヲ起シ柵埃ニ對シテ及抗
ヲ示スカ如キ不良ノ事ニシテハ如此ル輩ノ地方官之ヲ逮捕シ
テ嚴罰ヲ課スベキモノトス上記ノ人ハ最嚴重ニ懲罰セテ取
締リテ非違ノ事ナラシムルニ當リ非違ノ事ナラバ汝等ノ人ハ
地方官等ニ對シテ得テ罪人トシテ捕テ之ヲ懲罰スルコトヲ切望ス

光緒二十七年八月八日

通譯

ゴムボエフ

千九百三年三月九日

本文ト相違ナシ

エヌ、スタルク

千九百三年三月三十日外務省ハルビン派遣官名簿ハ本譯文ノ
高階アル休職大佐ヤコフ、ヒョードロウイツチルビノフノ名ニ
付シテハ本譯文ト相違ナキコトヲ証明ス

領事館規則第十九條ニ依リ國庫收入トシテ元トフルヲ徴収ス

外務省ハルビン派遣官ウサイツイ(四名各)

千九百三年三月三十日外務省ハルビン派遣官タル余ハ本譯文ノ
余ノ西澤アル休職大佐ヤコフ、ヒョードロウイツチルビノフノ名ニ

提供シタル本文ト一語モ相違ナキコトヲ証明ス

領事館規則第十九條ニ依リ國庫收入トシテ元トフルヲ徴収ス

外務省ハルビン派遣官

パー、ウサイツイ(四名各)

(寫)
添休書類第三號

譯文原本 北ノ松參號

一契約書

通台候補

ウエン、シヨウ

知州候補

ヤン、ジ、デレー

清國人株主

ジ、フ、エン、タイ

ゴ、ジ、エン、ユアン

ジ、エ、ン、フ、ア、ド、ウ、ン

ユ、イ、チ、エン、シ、ユ

シ、ヤ、オ、ズ、イ、シ、ユ

ヘ、リ、ズ、イ、ヤ、ン

グ、シ、ジ、タ、ン

露國人株主

ヤ、コ、フ、ル、ビ、ン、フ

清國光緒二十七年八月七日俄國千九百零一年九月七日樞密院
チヤン、シヤン、タイ其他ノ所ヲ石炭坑開墾ノ許可ノ旨ヲテ
報告ヲ提出スルト共ニ義擧銀座高兩ノ鈔ヲ提出シテ奉天
將軍塔ハ該報告ニ對シテ作事始メ許可ヲ指令ニ義擧銀
座高兩ヲ查收セリ且此事ハ奉天將軍塔及フイシ、エ、イ、上
奏ヲ經且ソ地域ノ精細ナル踏査ト明確ナル劃定ヲ為メ官吏
ヲ派スルトニ屬シテ裁可ヲ得タリ
ヤン、ボ、ー、フ、ーニ於テ南北ニ流ル、ヤ、河ハ地域ヲ劃シ此河ヲ西方



ニ此地域内ハワン、チエン、ヤオ作業ニ従事シ此河ミリ東方ハウ
エン、シヨウ及ヤン、ジレ、作業ニ従事セリ

税金ハ滿州地方ニ依リテ毎百中ニ對シ五吊ヲ納メ且重量税
トシテ前吊ヲ納ムモノトス

同時ニ會社ト事務局ヲ設置シウエン、シヨウ及ヤン、ジレト昔ニ
シラエニタイ、シエ、ドワン、ジヤオ、ズイ、エウ、ヘー、ズイ、

ヤン、ゴ、ジエン、ユアン、ユイ、チエン、ジユ、加入シテハ名ノ出資額ヲ賦
ニ萬參千兩ト定メ作業開始ヲ届ケ出シ

今ヤ鉉脈ノ豐盛留ヲ發見スルト昔ニ事業ヲ擴張シテ圍稅ヲ增加
シテテ留留ヲ擴大スルノ希望ヲ生スルニ至リ現時ガシ、ジタンハ銀

五千兩ヲ出資シ鉉山事業ヲ精進スル際圍稅大佐ヤコソル
ビノフハ銀上ニ萬七千兩ヲ出資シテ會社ニ加入スルノ希望ヲ表ス

ルニ至リ此等ノ金額ハ日農キニ事務局トシテ前萬參千兩トシテ四

萬五千兩トシテ此金額ヲ以テ今後ノ資本金ト定メテ此資本金ヲ四
拾五株ニ分チ七株ヲ五萬千兩トシテ毎株ニ三拾枚ノ株券ヲ發行

スルコトニ定メテ是レ調査ノ上依テ條例ニ抵觸セサルヲ以テナリ
株券自己ノ持株ヲ賣却スルコトヲ得ニ其都度株券ニ伴

人及立派人ノ氏名ヲ自署セシムルヲ要スルニシヨウ及ヤン、ジレ
ハ會社ノ創立者トシテ自己ノ持株ヲ社員外ノ七名ニ賣却スルノ

權利ヲ有セス唯社員中ノ七名ニ賣却スルコトヲ得
統會ニ依リテ社名ヲ撫順石炭會社ト稱ス社則權定及會社ニ

關スル諸問題ノ解決ハ社員中ヲ擧出セル人々ニ屬スルモノトス
霞圍ハ持株ヲ許シテ事業ヲ振興スルコトヲ專ラ將軍増及フ

イニ依テ五千ニ報告セラレタリ
該事ハ會社ニ關係ヲ有セリ今其書ハ此處ニ送ラレ各株主ノ氏名

ヲ自署シタル契約書ヲ檢査四週ヲ作ルモノトシ

本契約書奉天將軍ニ提供セシ又會社ノ事件ニ編入保存セラル
ヘシ且各株主ニ証書トシテ各壹通ヲ配付セラル

(次キニ各四名アリ)

光緒二十七年十一月一日

本契約書第一號至第十四號ニ至ル檢査通ヲ作成ス
第一號至第十號ハ奉天將軍衙門ノ事件中ニ保存セラル
第十一號至第十四號ハ文法事務局ノ事件中ニ保存セラル
第十五號ハ奉天駐在軍務委員ノ事件中ニ保存セラル
第十六號ハ外務省委員ノ事件中ニ保存セラル
第十七號至第二十號ハ各株主ニ至ル通死ヲ保存ス
本書即第拾參號ハ証書トシテ併存スル為メヤコフルビノフニ交
付セラレタルモノナリ
右訳譯ス

通譯 コルレジスキー、レギストラートル(身分名稱)

ゴムボエフ

千九百三年二月二十四日

譯文本書ト相違ナシ

エヌ、スタルク

千九百六年五月二十三日外務省ハルビン派遣官ハ本譯文ノ自合カテ
完備ナル休職大佐ヤコフ・ヒョー・トロウイッチ、ルビノフノ提出シタル
滿國存立ノ相違ナキコトヲ証明ス
領事館規則第拾壹條ニ依リ國庫收トシテ參ルルヲ徴収第
三號帳簿第百八十九號ニ記入ス
外務省ハルビン派遣官

ペー、ウサー、ワイ

千九百六年五月二十日外務省ハルビン派遣官ハ本譯文ノ自合

ニ於テ面議アル休職大佐ヤコフ、ヒヨードロウイチ、ルビノフ
ノ提出シタル本書ト一語モ相違ナキコトヲ証明ス
膠本ヲ本書ト對照スルニ忠實チ本書中ニ訂正削除其他特別
ノ事ヲ認メザリシ

外務省ハルビン派遣官

ペー、ウサーツイ

(寫) 譯文

下ニ記名スル余等撫順炭坑會社ノ株主スル零
團休職大佐ルビノフ、ハバロフスク市商人紀鳳台ト
清國人クンジンシ。ウシヤウ。ヤンシ、ロー。キエー、
ファ、トウシ。チャオ、グイー、ヤン。コー、シン、ウエシ。
ユイ、キエン、キエ。トノ間ニ一般合意ノ上下文ノ
條件ヲ締結セリ

一余等ハルビノフヲ社長ニ擇舉シ左ノ權限ヲ附
與ス

作業ノ場所ヲ定メ及ヒ方法ヲ擇フ事、鑛山技
師、事務員及労働者ヲ雇入レ其給額ヲ定
ムル事、作業ニ要スル機械、器具其他一切ノ
必需品ヲ購買スル事、建物ノ建設、石炭運搬

用既設道路ノ修理及新道路ノ開設、石炭倉
庫ノ建設及石炭ノ販賣ヲ主管スル事、石炭
ノ供給及一切會社ノ為メニ獲得スヘキ事、
物ニ関レテ諸管衙諸會社及諸人トノ間ニ
契約ヲ締結スル事、會社所有ノ山坑、物
件、及資金ヲ担保トシテ金額ノ多少ニ拘ラズ
社債ヲ起ス事、独立ノ主人ト同シク一切ノ事ヲ
主管スル事

彼レノ助役トシテ紀鳳台ヲ擇舉セリ彼レハ凡
テルビノフヲ補助レルビノフノ不在ノ時ニ彼レハ
委任ヲ受テテ彼レヲ代表ス會社ノ權利及利
益ヲ保護スル為メニルビノフハ會社ノ全權委
員及代表者トシテ露清兩國ニ對シ其國法

二、準據シテ交渉折衝スルモノトス
 三、株主中ノ何人トモニ社長ノ委任ヲ受ケスレテ會社ノ事務ニ干渉シ又ハ會社ノ計算ニ依テ如何ナル支出ヲモ爲スコトヲ許サズ株主中會社ニ對スル或ハ責務ノ履行ニ関シテ會社ノ出費又ハ損害ヲ来シタル時ハ自己ノ持株及自己ノ財產全部ヲ以テ之カ責任ヲ負フモノトス
 三、石山炭賣捌キヨリ来ル入金ハ銀行ニ預ケ置キ唯會社用トシテ支出スルモノトス
 四、會計ノ爲メニ事務本局及必要ナル各所ニ支局ヲ設立スルモノトス毎年四月十五日ヨリ次年ノ四月十五日ニ至ル年一度ノ終リニ於テ事務本局ハ會計報告ヲ編製シテ下月間即チ五月十五日迄ニ其編製表ヲ終リ各株主ハ會計報告ノ寫若クハ其按察書ヲ請求スルノ權利ヲ有ス
 五、株主ハ毎年十二月以上事務本局所在地ニ總會ヲ開キ社長ハ會期ニ週間以前ニ報告スルヲ要ス株主ハ委任權ヲ與ヘテ自己ハ代理人ヲ總會ニ出席セシムコトヲ得總會ニ出席セシム又代理人ヲモ出ササル株主ハ總會ノ多數決ニ服スルモノト認め總會ノ諸議案ハ一株一票ヲ以テ算シテ其多數決ニ依ルモノトス
 六、左記ノ諸事項ハ總會ニ屬スルモノトス
 一、會計報告ノ審議
 二、社資増加ノ爲メ新株発行ノ決議
 三、積立金ノ設定及其支出ニ関スル規定

二、各株之對るる利益配當額ノ決定
 三、各種ノ設備ニ要スル巨額ノ支出ノ決定
 四、各種豫見ス可ラザル諸問題ノ決定
 五、總會ノ決議ハ記録ニ登リ總會ノ出席者之ニ
 記名シ其決議ハ契約ノ効力ヲ有ス
 六、株主ノ權利ハ彼レノ死後其相続人ニ移轉スモトス
 七、本契約ノ本文ハ事務本局又ハ社長ノ手許ニ
 保存シ各株主ニ其寫ヲ配與セラル
 八、本契約ノ神聖ニ且堅固ニ遵守セラルヘキモノトス
 九、社長若シ株主又ハ社員ニ於テ濫費又ハ損
 害ヲ會社ニ及ボシタル時、總會ノ決議ニ依リ
 テ退職セシムルコトヲ得
 次ニ記名

本文ト相違アリ

撫順坑社長、株主、休職大佐

ヤークフ、ヒョードロウイッテ、ルビノフ

撫順炭坑誌(陸軍通訳徐晏波調査)譯文

千金寨楊柏堡老虎台三個所ニ於ケル炭礦清國乾隆年間ニ於テ土人ノ開墾採炭セルモノアリ盛京將軍此ヲ闡キ即チ土人ノ採掘ヲ嚴禁セリ當時ノ採掘ハ僅カニ半々年ニ過キサリシ而シテ爾今千金寨炭礦ハ清曆光緒二十七年八月十六日開坑シ九月二十日出炭セリト云フ千金寨炭坑ノ借區主任者ハ北京宣化府人張永堯(ナルモノナリ)候補軍民府年四十三)其借區料銀壹万五千兩(壹兩ハ我一兩五拾錢前後ニ當ル)此外運動費約三万余兩而シ石炭賣渡稅トシテ百分ノ五ヲ清國政府ニ上納ス千金寨炭礦ノ境界ハ東楊柏河ニ至リ西李石寨ノ東ニ至リ北渾河ノ南ニ至リ南千金山下ニ至ル此四境內ニ出炭地アレハ則チ任意採掘スル

ヲ得地區内ノ官有ノ建築物ハ任意之レヲ使用シ民有ノモノ之レヲ貸與スルコトナレリ

次ニ楊柏堡並ニ老虎台ノ炭坑ハ西楊柏堡ノ河東ニ至リ東大鷹嘴村ノ西ニ至リ南山下ニ至リ北渾河ノ南ニ至ル此礦區ハ清國ハ公羽壽ナルモノノ借區ニ係ル而シテ其借區料及上納稅ハ幾何ナルヤ今譯シテ光緒二十七年冬其借區人張翁ノ二人各其境界ヲ爭ヒ終ニ訴訟ヲ起シ翌年春公羽壽ノ敗訴トナル此ニ於テ公羽壽ハ其借區料不足ノ為メ露國觀譯官此圖台ナルモノト南儀シ楊柏堡老虎台ノ炭礦ヲ露國人ニ賣リルベシト採炭事務ハ露國管掌セリ而シテ千金寨炭礦ノ出炭ハ悉ク之レヲ露國ニ賣リ其價格百斤ニ付四十錢乃至五十錢トス

蓋其重量斗ヲ以テ量リ一斗方十斤ノ規定ナリ
又烟台山炭礦ヨリ出人稱テ磨箕山炭室迄ト云フ烟台
ヨリ山炭坑ニ至ル清里約二十方里余其地區ノ境界ハ
東西約二清里余南圍屏山北磨箕山山嶺ノ北ニ
至ル此炭礦ハ高麗人採掘以來ノ千四百余年ナリ
光緒二十四年秋即チ明治三十一年十月中英國人モリ
技師清國人ヨリ買收シ自ラ採掘中更ニ英國人ニ
讓渡シ明治三十八年春日本官憲ニ歸セリ
其鐵道敷設ハ光緒二十九年九月ヲ蘇家屯ヨリ延
長シテ撫順城南渾河千金寨老虎台楊相台ニ
至ル明治三十八年四月中皆野戦鐵道第一採炭
班ニ歸シ採炭事務ヲ管理セシメ云々
以上ノ事實ハ僅ニ其大畧ヲ記スルニ而シテ已往、

事誠ニ考據ナシ者ハ人之ヲ諒セヨ

撫順炭礦開採既往事實概要

ポーツマス平和條約附文中有「東清鐵道之屬シ又ハ其利益ノ為メニ經營セラルル一切ノ炭坑ヲ移轉讓渡スル」云々之文字正何處ノ炭礦ヲ日本ニ讓渡ス可キニ付テハ一言一語ノ之ヲ明セルモノナシ是ニ於テカ問題ハ生モレヨシ撫順烟台等ノ炭礦ハ平和條約ニ基キ果シテ日本帝國ノ有ニ歸スルモノナリヤ否ヤ如何ト重大ナル本問題ヲ研究スル材料トシテ先ヅ撫順烟台等ノ炭礦開採既往ノ事實ヲ調査スルヲ必要トス是ヲ以テ本委員ハ露國陸軍大佐ルビーンノ代理人ハ爾國人ヨリ此レノ當委員ニ提

出セル書類奉天軍政府調査ノ書類並ニ千金寨炭礦現地ニ於テ同地株炭礦ノ調査セル書類其等所謂撫順炭礦開採既往ノ事實ヲ審核スルニ左ノ如シ

一、所謂撫順炭礦炭名

所謂撫順炭礦炭名目ハ該炭礦附近ニ撫順城ハ一市街ノ存スルヨリ銘名セラレタルモノナシ世人ノ稱シテ撫順炭礦ト謂フ炭區ハ撫順ニ存セスニテ渾河ヲ越ヘテ其南東一帯ノ地域ニ存スル爾來(十餘年)楊柏堡ハ老虎台ニテ所ニ於テ採掘ヲ試ミテレタルモノシテ目下我採炭班主ニテ經營スル所ハ千金寨ノ炭礦ナリ

二、所謂撫順炭礦ノ三大區合

所謂撫順炭礦ハ從來ニテハ大炭區ニ區分セシ此ニ大礮石境界ハ楊加堡河ニテ二炭區共ニ露清共同ヲ以テ經營セシキモノナリ

三、右二大礦區經營者ノ性質

楊州僅河兩部三石炭區ハ其初メ清國人王承堯ナル者ノ手ニテ經營セル處ナリシモ後々露清銀行ニテ經營ニ加入シ露清人ノ共同ヲ以テ一種ノ株式會社組織トシテ經營利ノ名ニテ經營セシ面シテ楊州僅河東ノ石炭區ハ其始メ清國人公羽清ノ主トシテ經營セル處ナリシモ此石炭區モ亦後日ニ至リ清國人龍鳳台露清人大佐ルビノノル等ニ加入シ撫順公司即チ撫順炭礦會社ノ名ニテ株式組織ヲ以テ露清人ノ共同ニテ經營セシメリシモノナリ

四、開辦前後ニ若ク採炭經營ノ事實

如ク新揚撫順炭礦ハ二大石炭區ニ區分セシ各々二個ノ獨立セル會社ニテ經營セラルシモ二東清鐵道會社其若ク全ク獨立セル一法人ノ企業ニ屬シタルモノナリ日露戰爭漸ク近接スル從ヒ採炭其他炭礦經營等ニ伴テ東清鐵道ト密接ノ關係ヲ有スニ至リ撫順炭礦

亦蘇家屯ヨリ其石炭區附近ニ支線ヲ延キ之ニ據ツテ石炭ヲ東清鐵道ニ供給シ而シテ戰況ノ進マニ從フテハ王承堯及露清銀行等ノ共謀ニ石炭區即チ華興利公司ノ經營セル石炭區石炭及龍鳳台人ノ依リ據據セラレ其石炭及ハ悉ク東清鐵道ニ供給セラレシモノナリ蘇家屯ヨリ撫順ニ至ル支線鐵道ハ何人ノ名何法ノ計ハ果シテ經營セラレタルモノナカハ證據ノ徴ヲ可キモノナキモ撫順炭礦會社ハ長ルビノノル代理人龍鳳台ノ提出セル申請書類ニ依リハ同會社敷設セル處ナリト云フナリ

丁

撫順炭礦下炭申請ノ件ニ関スル意見

一 本件申請ノ要旨

所謂撫順炭礦中楊架堡河、東部ニ存スル礦區ハ撫順炭礦會社ノ經營ニ係リ、私的財産ナル故ニ國際公法並ニポーツマス條約ニ所謂私有財産不可侵ノ原則ニ基キ、該炭礦ヲ還附シラレ度且ツ該礦附近ニ延長シラレタル鐵道支線、同會社ノ私的施設ニ屬スルモノナルカ故ニ同レ之カ下渡ヲ受ケ度ト云フニ在リ

ニ 該礦山採掘ニ関スル既往ノ事實

之ニ関テハ別紙調査書類ノ如シ

三 本申請ニ関スル法理上ノ見解

由請ノ目的タル炭礦カ東清鐵道會社ヨリ獨立セル一私人ノ經營ニ屬シラルモノナルヤ亦疑ノ容ル可キナレ然ラハ該礦區ノ私人財産尊重ノ主旨ニ從ヒ之ヲ申請人ニ下炭ス可キナルニ

之ヲ國際公法並ニ海牙條約第五十三條等ニ依リ審案スルハ個人ノ經營ニ屬スル炭礦ノ如キハ、軍事上ニ必要止、其業之ヲ其權利者個人ニ還付シテ若シ損害ヲ生ジタルモソルトキハ之ヲ賠償スルガ本則トナスカ故ニ該礦區ノ申請人ノ還附シ且ツ我軍占領以後ニ於テ該個人ノ蒙レ損害ヲ賠償スルヲ適當ト爲スルヲ見ユ
然レ更ニポーツマス條約及滿洲ニ関テ日清間ニ締結スル

此條約ニ基キ之ヲ研究スルトキハ該條約個人財產專
重ノ原則ニ例外ヲ置キ法理上一私人タル東清鐵道會
社ニ屬ス財產ヲ日本ニ讓與シ又同鐵道ニ屬ス炭砒並
「同鐵道ノ利益ヲ爲シ採掘ヒルハ炭砒」ヲ日本ニ帝國ニ讓
與シタルヲ以テ本向撫順炭砒ノ如キハ總令個人ノ經營ニ屬シ
且東清鐵道其者ニ屬スルモノニテラサルニモ戰中ノ事實
ヲ示スル如ク該礦ノ炭塊ハ絶對的ニ東清鐵道ニ供給
セラレタルモノニテ以テ換言スルハ該礦區東清鐵道ノ利益ノ
爲メニ採掘セラレタルモノナリ故ニポーソマニ條約並ニ日清條
約ニ依リ該礦區ハ日本帝國ノ有ニ歸シタルモノニテ該礦
山、山田企業會社ト今於ラ之カ下戻ヨ日本帝國ニ對

シテ主張レ得可キ理由モナク其被リタル損害ハ露
清二國政府ニ對シテ要求ス可キ順序トス該礦山附
近ニ延長セラレタル線路ノ如キハ日本帝國ノ之ヲ全然東
清鐵道ノ支線ト認メ是レ亦條約上帝國政府ノ所有
ニ歸シタルモノト云ハサル可カラズ

四、本申請ニ關スル處分安未

以上ノ理由ニ依リ本件申請ニ關シテハ左ノ如ク通達スルヲ
適當ト信ス

左記

通達書

申請人露國人陸軍大佐ルビノフ

右代理人葡國人ノイナル、ランジエ

右申請ニ係ル撫順炭砒及同砒ニ延長セラルル
鉄道支線其他附屬物品下床請求ノ件ニ關シ
審安ホスルニ

申請ノ目的ハ該炭砒東清鉄道ノ利益ヲ為シ
採掘セラルルノ室ヲ可クサル垂実ニシテ又同砒ニ延長
セラルル鉄路東清鉄道ノ支線ノハ是ノ亦室ヲ可
ラサル垂実ナルカ故ニ該砒ハ並ニ鉄路ハポーツニス条
約第六條第一項並ニ滿洲ニ關スル日清條約第一
條ニ基キ露清兩國政府ノ合意ヲ以テ日本帝
國政府ニ讓與セラルルモノニシテ此垂實ノレ既ニ確定

不動ノモノニ屬スルカ故ニ申請人ノ申請ハ日本政府ノ
應ルニキ限ニテラストス

右通一達ス

年月日

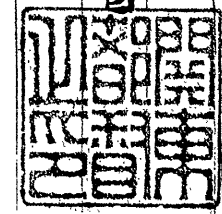
外國人私有財産整理委員長石塚英藏

明治三十九年十二月十九日

御參事 四三五號

明治三十九年十二月七日

關東都督男爵大島義昌



外務大臣子爵野村重毅

東京 外務大臣

本年九月五日機密送第八號ヲ以テ南滿州鐵道附近礦山ノ義ニ付御照會、趣テ兼爾來鐵道沿線ノ各部隊ヲシテ夫々調査セシメ候得共何分是等ノ業務ニ經驗アルモノヤク多ク、時日ヲ要シタルニモ拘ハラス充分希望ヲ充タス能ハス遺憾、有之候即チ調査ノ結果別紙ニ相認メ及御送付候間右ニテ御兼知相成度此段及回答候也

追テ撫順炭坑ニ付テハ已ニ御兼知相成候旨故茲ニ相省キ候且ツ又安奉鐵道沿線ノ分ハ目下調査中ニ付逐テ進達可仕候也

陸 單

炸子空

一、炭坑、起因及沿革

炸子空炭坑ハ瓦房店東方約一里、旭ニアリ清國人李麟ナルモノ、乾隆年間清朝ニ出類シテ龍票ヲ受領シ尔来百有餘年間採堀シ来リシカ光緒二十四年十月而該國ハ東清鐵道ノ經營ト共ニ技師長ポートレン(丁様人)技師プリニコ(全國人)ヲ派遣シテ李麟、喬李樹聲ニ對シ威赫的強請シテ其採堀權ト共ニ礦區一帯ヲ買収シ斜坑(石造坑内ニ一八八九九年ト彫刻シアリ)一堅坑セリ開堀シ支配人兼ニ技師長以下ノ官舎兵舎汽機庫諸工場火藥庫等ヲ建設シ盛ニ採炭ニ從事シ東清鐵道ニ供給スル目的ヲ以テ瓦房店停車場ヨリ分岐線ヲ敷設セシカ爲メ用地ヲ買収シ踏盤橋礎ニ已ニ完成セリ獨ニ光緒二十六年中義和團ノ變アリヤ一時採堀ヲ中止シ總テ所要ノ機械及雜品ヲ

陸

單

煙台ニ輸送セリ(一説ニ哈爾濱トモ云フ)光緒二十七年再ニ技師レケリウ(南人)ヲシテ採堀ヲ開始セシムルモ前年而該國人退去後清國人玩心ヲ乱堀シ坑木枿木等ヲ除去シ水脈ヲ破壞スル等諸般ノ設備廢棄ニ屬シタルヲ以テ更ニ致ケルニ及ビ坑ヲ完堀シタモ施設監督甚宜キリ得ス成績不良ナリシカ時恰モ煙台炭礦ノ經營者先ニ撫順炭礦ノ取扱見等アリテ光緒二十八年終ニ其工事ヲ中止シ尔来清國人ノ乱堀ニ要ヲ其主ナルモノハ李樹聲鐵良貴ニ人トス(一説ニ而該國ノ事業中止後後歩全ヲ徵シテ清國人ノ採炭セシムルト)其後日而該坑ト昔ニ比シテ頗ル一時期信州軍政署ノ管轄ニ屬シ後其所管轄ノ瓦房店軍政署ニ移リ明治三十八年八月十九日志岐信左郎ナルモノ布石炭採堀ノ認可ヲ得ル所全人ノ致クシテ事業ノ經營ニ從事シタリ

二、炭層及炭質

地質亦三紀以前ニ構成セラレタルモノナラシキニ進發作用ヲ受ケタル
傾向アリ從テ地層錯雜シ炭層モ自ラ各処ニ分散スルノ状態
ニアリテ一定ノ傾斜及走向ヲ有セス層子亦一様ナラス其層子六十
ニ尺以上ニ透スルモ薄キハ僅カニ數寸ニ過ラス或ハ全ク消滅シテ其
所在ヲ失フ部分アリ以上ノ如クナリテ炭質モ亦知ラズテ若果
アリ硬軟一定ニ上炭ニ揮發成分ニ富ミ灰分少クシテ汽機車等
ノ燃料ニ適セリ下等炭ニ至ラズテ硫氣灰分多クシテ僅カニ吹鑿
用ニ過サザルニ至リ粗悪ノ粉炭ナリ

以上ハ現今採掘中ノ坑内及地質上ヨリノ觀察ヲ綜合シタルモノ
シテ詳細ニ目下調査中ナリ然レバ事業ノ進行ト共ニ一大炭脈
ヲ發見スルノ時期アルコト就テハ當業者ノ明言シ居ル所ナリ
徑東兩路間ノ間坑トシテ地區及清國人ノ採掘シタル地城ハ炸室
ノ東北ニ跨ル山脈ノ一部分ニシテ逆發作用ノ結果着炭距離

陸軍

淺近ナル部分ハ地層混乱甚クシテ清國人ノ坑業ハ極少
種ナル者ノ排水ノ設備不完全ニシテ僅ニ人力ニヨリ坑息ノ手段
ヲ採リ所謂内地ニ於ケルノ裡堀リト稱スル類ニ過キヌ兩路間人ノ試
採トシタル地城トシテ單ニ有望ナル採炭地區及地城ヲ探査シ
タル外ナラス

三、事業ノ經營方法及現在ノ状況

志岐信左郎ハ採掘許可ヲ受ケテヨリ多クノ資金ヲ投シ事
業ノ經營ニ着手セリ本年八月下旬獨逸ノ振付ヨリ旧坑ノ
排水ヲ終シ九月二十日頃ヨリ採炭ニ着手シタルノ事ナリ以テ一日
僅カニ古七方内外ノ出炭ニ過キザルモ漸次工事ノ整頓ト
共ニ價二十五方外ヨリ得ヘト云フ且目下計畫中ノ新坑開
鑿ニハ曉ニハ日々出炭多ク觀ニ上ルナレシ
現今使用人負ハ左ノ如シ

本邦人
清國人

十四人
九十五人

陸

軍

1-1808

五湖嘴炭礦

一、起因及沿革

炭礦ハ尾房在西南約十三里より東面二區に分レ東リ東
票ト云ヒ西リ西票ト稱ス之前者ハ清國人陳伯昌オモク祖先
乾隆年間ニ於テ龍票ヲ受領シ尔東百有餘年同産綿
トシテ採掘シ来リシカ先緒ニ十八年十月露國商人ケウオ井ク
オラスケリウスノ三人技師ロケッ伴ヒ来リテ陳伯昌劉春
浦ト炭礦賃借ハ帳高ク遂ケ(感迫モ形跡アリ)三十五年中
間賃借ノ契約ヲ締結セリ其内容ハ陳伯昌對シテハ出炭額
ノ一新古カク劉春浦對シテハ毎々一万吨ヲ又拂フ契約ナリ
此ニ於テ露國商人ハ全起ノ石炭採掘ヲ開始シ露國民有地ニ
輕便鐵道ヲ敷設シ埠頭ヲ築造セリ日露條約締結之際
露國商人ハ悉ク通商ヲ被レカ採掘ノ者ノ技師ハ經費ハ多

陸 軍

額ト云モモ出炭額少量ニテ之ニ伴ハス成績良好ナリサリシカ
如シ

明治二十八年八月十五日吉野岐信五郎對シ(一)軍事上ノ需用ヲ
充スルノニ軍用ノ剩餘アル塔台ノ採掘者之ヲ販賣スルコトヲ
得(ト)條件ノ下ニ採掘ヲ許シテ之ヲ都令スル如キ十月
十七日附リ此ノ如ク採掘ノ命ナリ

二、出炭層及出炭質

會炭地域ハ東西約一里半南北半里條ニ亘リ其坪數約四百
一ノ坪ニ達ス地質ハ真山石粗砂山石粘板岩ノ互層ヲ成シ炭
層其間ニ存在ス然レモ其層狀錯雜ニシテ或ハ段狀ヲ呈シ或ハ
皿狀ヲナシ時ニハ水平層ヲナスコトアリ 礦巨ノ京都ノ於テ地層ノ
錯亂甚シク西部ニ至レテ從ヒ稍整ヘルガ如シトモ在實ニ全層
狀リナサスレテ厚薄一様ナラス厚キハ十二尺ニ達ス又時ニハ

其所在ヲ失フ箇処アリ之ヲ西至ルニ出火層ハ波状形及ヒ^四状
形ノ底部ニ存シ者処ハ分散シ甚巨城廣大ナラズシテ三層坪
内外ヲ採掘シ得ル箇処リ以テ最大トス出火層ハ多煙多臭
細微ノ粉末ニシテ揮發物少ナラ火力亦薄弱シテ淡紅色ノ
微煙ヲ放シテ燃焼ス故ニ流固用トシテハ勿論暖炉用トシテハ
適当ナラス吹響機用トシテ使用スルニ過キス

三、事業ノ經營

志岐信太郎ハ石炭採掘ノ許一ヨリ得テテ^三政々トシテ事業ヲ
經營シ九月末第一坑リ丁家屯ノ東ニ開キ其後第二三四坑ヲ開
掘シ着々其歩ヲ進メ其出火多量ニ下排水ノ設備不完
全ノ爲メ一時第一三四坑ノ採掘ヲ中止シテ其間第二坑ヲ
多量ノ出火アリシガ爲メ良好ナラザルヲ以テ點検スル僅カノ
収益ヲモ得ん能ハル状態ニテ維持困難ニ陥リ殆ト其權
利ヲ放棄スルノ已リリ得サルニ至ルヲ計ラレハ有様ナシ

陸軍

煙台炭坑

一、炭坑の起因

遼陽東支街道上ニ有リ煙台街ノ東方約三里ニ於テ南北ニ連亘スル一帯ノ丘陵アリ其延長約三里幅員約一里ノ間古來産炭地トシテ頭著クテ所謂煙台炭坑之トナリ

産炭地ノ北端ニ有リ磨肺山ト称シ上陸中比高日最大ナルモノトス之ヲ以テ南ノ穴大起点ヲ鐸子峯尖山ト貴子山ノ盤道峯ノ次見山ノ城家山ノ松樹峯ノ五項山等ト稱ス産炭地ノ最古事突ニ起スル處明山ト云フ

煙台炭坑採炭ハ其起因甚ク遠シ口碑ノ傳ルル所ニ依リテ磨肺山一帯ノ地ハ古來ノ領域ナリ時代ニ於テ古來人葛叔山ナニ之ト稱シ採炭採石ノ業急ニ興リ屋明山古カハ清聖太子河右山岸ノ燕雀城ニ居ル葛叔文ト相呼應スル有リ磨肺山

陸 軍

ニアリ磨肺(石臼)ニ樹立セル一大旗ヲ以テ記號ヲ約シテト云フ蓋シ磨旗山ノ名之ニ依リテ起リ以後有稱シテ磨肺山ト稱セラルト西人ノ煙台炭坑ハ唐朝ニ於テ古來人ノ採炭ノ後事セルモノト係ル故ニ現今磨肺ニ於テ屢々木柵ヲキ同形ノ坑道ニ掘リ中ニ古來炭坑ノ陶器(主シテ油壺)ヲ發見スル多ク故ニ西人ノ遺跡トナリ

尔后多クノ年所ト變遷シテ經テ嘉慶初年頃(今ヲ去ル百四十五年)前)吳某ナルモノ煙台炭坑採炭ノ許一ノ得テ磨肺山ノ尾明山ト云ハ一帯ノ炭坑ヲ一帯ニ採炭セリ當時其利益ハ極メテ巨額トナリト云フ起テ嘉慶十七年頃ヨリ煙台炭坑ハ數回ノ暴亂ト數回ノ彩票トト合劃セラル

茲ニ龍票ト云ハ軍切其他ニ依リ世襲財産トシテ採炭權ヲ附子セラルルモノニシテ彩票トハ外務部制定ノ礦務章程ニ

依り一定ノ租税ヲ納メテ採掘ニ從事スルモノナリ

三、現況ニ據リテ其經歷

其後煙台炭坑ノ龍票及杉票ハ数人ノ手ニ讓出又ハ分割セラレ
光緒二十三年(明治三十年)頃ニ於テ龍票所有主次ノ如シ

磨 崎 山 韓 朝

鐸 子 峯 王 振 綱

砒 盛 堡 祝 恩 隆

老 虎 峯 趙 沛 恩

北 茨 見 山 劉 祿 秀

南 茨 見 山 王 振 綱

北 田 家 溝 赫 松 山

大 宍 窪 (南 田 家 溝) 李 潤

各就票記載ノ區域ニ附録第一、二号ノ通リトス而シテ其境界ハ
陸 單

錯綜シ直接当事者ニ就テハ取調ラズニ由テ領得セシモノ多ク
然レ而路國東清鐵道會社ハ滿洲經營ヲナスニ方リ厚ク地方
官ニ賄ヒ遂ニ地方官ヲ就票所有者ハ東清鐵道會社ニ賣
却スル方有利ナリトノ勧誘ヲナスニ至リ其結果トシテ左記五票
主ハ光緒二十五年九月一日ヨリ以テ賣買ノ契約ヲ了セ

地 區 票 主 賣 買 價 格

磨 崎 山 韓 朝 銀 二 万 兩

砒 盛 堡 祝 恩 朝 銀 二 万 兩

北 田 家 溝 赫 松 林 銀 一 万 兩

大 宍 窪 (南 田 家 溝) 李 潤 銀 一 万 兩

北 茨 見 山 劉 祿 秀 銀 一 万 兩

右ノ圖ニ於テ附録第一號ニ示スル如ク石炭採掘ヲ結了セシ
時ヨリ租借結了ノ期限トスルコトヲ清國官憲ト於テ承認セ

故以上五票ハ当然林所有ノ屬ト自然スヘキモノナリ
殘餘ノ三票ニ付テ取調スルニ如シ

一、先虎山領ハ票主趙沛恩ノ言ニヨリ八同人ハ先緒二十五年九
月東清鐵道會社ト賣買契約ヲ爲シ、就票ヲ携帶
シ旅行中紛失シ爲テ契約不調ト終リシト云フモ信ヲ措
キ難シ蓋シ或ハ賣買ノ契約結了セウト云フモ兩路人カ来テ
採堀ニ着手セサリシ以テ林ノ如キ辭柄ノ下ニ林所有權ノ
下ニ附セウケリ免カレトスルニアラサカ免ト爾他ニ証跡ナキ以テ
判断シ難シ

二、鐸子峯及南茨見山ノ票主王振綱ハ目下遼陽知州衙
門ニ取保セウシアル以テ其實跡ヲ得難キモ清國官憲ニ
托テ書類トシテ人ノ男系ヲ取調ル結果尤、如シ

鐸子峯ハ先緒二十五年九月頃(明治三十三年)年報銀

陸 軍

五、朝鮮南^西清國官憲ノ取保ヲ得ル^ルナリテ兩路
國東清鐵道會社ニ借付ケ官憲ニ亦之ヲ黙許シテ
依テ兩路人ハ之ニ暨坑ヲ穿テ大規模ノ採堀ヲ開始セリ
南茨見山ハ明治三十三年十月王振綱ヨリ官憲ニ認
可ヲ受ケル^ルナリテ東清鐵道會社ニ借付ケ人各仁成ニ貸
与シ居ル東清鐵道會社ト關係セカ^ルル米國人コルトマ
ウス(清國人等ヲハ
海關東ト云)ト昔ニ兩路國ノ取保金ニ依リ採堀シ
然レ、明治三十三年十月東清鐵道會社カ烟台兵站司
官官憲ヨリ取保付ケ云爲シ^ルアリ傳聞シテ清國
官憲ハ認可ヲ受ケスレテ採堀權ヲ外國人ト轉讓
スルハ不法ナリト名義ヲ以テ票主王振綱ヲ監視スル
就票ニ枚(鐸子峯、南茨見山)ヲ没収ス

然、別之王振綱身某の調を結果左、如し

中央礦務局の城南茨見山区の天利公司の經營を
委せしむる謀り昨年未遑陽城守尉に命じ票主王
振綱の口を以て統票の統票ト交換すべしと命じ統
票を以て王の統票の祖先の軍功を以て得ん世襲
の權利ありしを統票ト交換するを得ずと拒絶し其為
忌憚り觸れ其後王が所有票内、大有溝、李及
朱の三ヶ所、中央礦務局の派隨を礦務征稅委員
張壽華が改打せしむるに實、下は本年正月より
統票の官沒し又その收條を云々

之より要する、老虎峯、鏢子峯、城南茨見山の所有權は未だ明
瞭せず

現時、彩票に屬するもの孰れを光緒二十八年(明治三年)以後

に於て認めらるるもの其地已の票主たる如し

地目

票主

張家溝

王本錫

展明山

天利公司

右、内張家溝の光緒二十八年十月三日(明治三年)附録に
礦務委員張壽華、張發給を書類より權利を証明し
り然し本年三月に於て有權者王本錫遠陽の死後其後
継者ナカリしを以て其翌四月十四日遼陽知州何有琦、出生書
本文より天利公司の年々經營せらるるを
展明山の光緒二十九年(明治三年)より天利公司の年々經營
してあり

三、烟台炭坑採掘禁止の解除

明治三十七年九月、烟台炭坑の領し清國人の採掘を全

禁止せし以後明治三十八年十一月に至りては天将軍衙門礦務
局長張壽華ハ十一月二十日附リテ烟台兵部司官自中課太郎
ニ宛テ其官地尾明山并ニ張家溝ノ採掘ヲ出禁シ其官地以
等ノ地域ニ而該國ノ租借地ト全然交叉スルヲナキヨリセリ然レ
烟台兵部司官自中課ハ聞東總督ノ認可ヲ受ケテ十一月二十五日
附リテ全ク採掘ニ着手スルヲ許シタル旨ヲ指示スル旨ニ
而シテ右内張家溝ト稱スル一部ハ明カニ李潤所有訖業
ノ所屬大窪(南白家溝)ノ境界内ニ侵入シ又其官地ハ全然
王振綱ノ所有南茨見山正ト合一セリ破テ
又東天利公司ナル多ク其天将軍ノ官業ニシテ委員ノ炭坑ニ
派シテ監督セシメリ其炭坑ノ得生及シテ委員ノ炭坑ニ
ニ十七日(本年一月)委員董董系和タルヲ煙台炭坑ニ派遣シ天
利公司ノ監督ト保セテ附近民業炭山ノ徵稅ヲ去テシメリ

陸軍

東天将軍衙門礦務局ノ前送ノ如ク彩票主ヲ指示シテ烟
台兵部司官自中課ノ採掘認可ヲ得タルニ拘リテ事實上所屬
南茨見山ノ一部ニ大有溝ヲ天利公司ノ經營セシメ尾明
山ハ炭質良好ナリ爲メ全ク官業トスル
本年清曆四月ニ是ノ遼陽知州ハ其天将軍ノ命ニ依リ東ハ
八月ヨリ張家溝並ニ大窪ニ兩坑ニテ其東官業トナスル旨ヲ告
示セリ

四、採掘禁止ノ一部ノ採掘黙許及ビ區域

聞東總督ハ明治三十九年七月十一日聞東憲兵隊長ニ命シ憲
兵士官以下八名ヲ煙台炭坑ニ分遣セシメ全地ニ於テん清國人
ノ採炭ハ尾明山ヲ除キ他ハ全ク禁止スル旨ヲ令シ且ツ之官
行セシメリ
之ト同時ニ聞東總督村ハ獨リ尾明山ノ恩惠的ニ清國人ノ

採堀ヲ黙認ス然レモ決シテ採堀權ヲ与ヘタルコトナラザルコトヲ訓令シテ
リ若シ昨午未ニ於ケン煙台官帖司令官月本課長即ノ許
テ云爲スルモノアラハ次ノ要旨ヲ以テ記示ス(カ)トテ命セリ

煙台官帖司令官ハ昨午十月二日於テ炭坑採堀ヲ支那人ノ許
可シタル者尙燃料ノ欠乏ニ支那人ノ窮乏者ヲ憐シテ尙尙
独断ニテ許可シタルモノナラハ總督ノ許可ヲ得タルモノニアラザルカ故ニ
之ヨリテ得タル採堀權ハ悉知ナリ

總督ハ茲ニ軍事上ノ必要ヲ支那人ノ採炭ヲ禁止ス
但シ清國人ノ窮乏者ハ(カ)モ(カ)リ以テ特ニ尾明山ニ採炭ヲ默
許ス

當時恰ニ雨季ニ際シ採炭労働者ノ帰郷中多ク利角レノ
獲ヲ見ルナリ最モ内河ニ支那人ノ服行セシメナリ
其後張家溝ヲモロ域ヲ限定シテ黙許スルコトナリ且モ巨域ハ

陸軍

東西ノ境界 東崗禧線ヲ崇林寺(崇寧王廟)ニ至

スルコトナリ

南北ノ境界 張家溝南端の台子、南端ヲ過スル禧

度線

之ノ同時ニ若シ明治三十八年十月二日附ノ記書ニ記載シテ
所謂張家溝ノ巨域トモ異名トシテ存スルモノアリテ重要
トシテ記示ス(カ)トテ命セリ

李調ノ所有スル南田中家溝、統票ハ兩路圖、租借ニ屬ス而
シテ明治三十八年十月二日附ノ張家溝草カ烟台官帖司令
官ニ提出スル親書ニ兩路圖租借地ト接セザルコトヲ明記
セシメ拘ラズ該親書ニ記載スル張家溝ノ地域ハ李調
ノ統票ニ侵入ナリ

我軍衙ニ於テ採堀ヲ黙許スル所ハ租借地ト交又セザル

地点ノ制限

五、煙台炭坑ノ價值

煙台炭坑ト云フ所炭脈ヲ存シ之ヲ採掘スル為メカカシ西女
 7 甚多ク少クシ然レモ僅少ノ坑区ヲ除ク外ハ其炭質良好ナラス
 殊ニ東部龍明山附近ノ如キハ全ク塊炭ヲ産スルナラシ粉炭
 少クシ其價値甚多ク又トモモ附近ノ住民ハ之ヲ泥土ノ混
 和炭固状トシ燃料トシテ使用スルコト以テ土人間ニ於テ需
 用頗ル多シ

現時煙台炭坑ニ於テ採炭方法ハ兩隣國人ノ設計ニ依リシモ
 規模稍大シテ鑛子並ニ西方大鑛坑アル清國人採掘法
 悉ク幼穉ナル中掘取トシテ一見之中多クナレ

煙台炭坑ハ毎年五月中旬ヨリ八月中旬迄ハ概テ其作業ヲ中止
 スト云フ此時期ハ雨季ニ屬スル為メ故ニ採掘困難ナルト云フ

陸軍

山東人ト云フ者ハ此時期ヲ利用シテ帰省スルモノト云フ
 清國人ノ採掘法ハ石炭ノ販路ハ炭坑中至リ多クハ四維太岳
 附近ヲ經テ太子河ノ水運ヲ利用シテ沿岸各所ニ運搬ス又北部
 ノモノハ多クハ馬車ヲ利用シテ東方方面ニ搬出シテ販賣スルコト云フ
 煙台炭坑ヨリ副産物トシテ燃料ヲ産ス
 今者炭坑ヨリ産出スル炭質ニ等級ヲ付セハ左ノ如シ

唐勝山	塊炭	第一等
芦家屯	全	全
茨園山	全	全
又繁道卷	全	全
碓盛堡	全	第二等
鑛子山	全	全
先虎山	全	全
又貴山	全	全
古北回成溝	全	全

大榎溝

全

全

張家溝

(同上大窪村
称云此也)

五三寺

尾明山

五三寺

廣勝山、所謂古藤時代、採掘ヲ連続セリ、旧坑多シ、
此、作業甚ク困難ナリ、又、戸家匠ハ清國人ノ如ク規模ヲ
以テシテ、利益僅少ナリ、碩盛匠ハ廣見山ハ採掘ヲ開始シ、
日古千、カカ故ニ侵令ハ規模、方法ヲ以テス、カカ將ニ甚ク有
此、ト云フ

又、清國天利公司ハ田中水溝、東方約一里ニ於テ、カカ新坑
巨ク発見シ、カカ九、十月、採掘ニ着手ス、カカ計画ナリ、カカ
四ノ採掘止、カカ其計画ヲ廢ル、カカト云フ

陸

單

附録第一

李洞ノ詔票譯文

旨ヲ奉シ奏明シテ批准ヲ經テ道々業ニ在リ今原
陽城守尉知州カ招券セシ盛京漢軍讓黃旗人福謙
佐領下ノ壯丁李深ハ原陽州管下大定ニ後山炭坑一ヶ所
採炭シ原領セシヨリ正額旗尉衙門ニ毎年課賦十七兩零
七匁八釐ヲ上納ス

嘉慶十七年十一月十日

左票旗人 李深 原領

陸 軍

附録 第二

龍泉區域

唐崎山系

唐崎山全部

東西南北各其山林系

系主

驛

潮

陸

單

附録之二

鐸子嶺 粟巻堂

東西寛

三万七千四尺

南北長

四万九千七尺

東、鐸子嶺 杜康之里

西山ノ坂下大根洞溝之里

南、尖山ノ頂上ノ砂盛堡 訖粟ノ里之里

北、鐸子溝 大道之里

嘉慶十七年十一月辛未日

右 粟

王 志 芳 録 領

陸

軍

附録 牙二之

石盛屋 西三三

東西寛

巻十四号

南北長

四号 廿七号

東尖山子、出井三三

西尖山子、下ノ岡三三

寺ハ楊樹林子三三

北ハ根洞溝三三

七加慶十七号 土月十日

右票族人

祝天福

辰領

陸

軍

附録第三四

老帛山嶺(貴子山)票

東西寬 一里十四弓

南北長 三弓七寸弓

東西、貴子山林麓と云ん

東、老帛山嶺と通る大邊

北、双廟子所東西と通る大邊

左 票主 趙沛恩

陸 軍

附録第二

茨見山(北)

東西寛

三百六十

南北長

六百

東小盤通嶺下

西小盤通嶺下

南小盤通嶺下

北小盤通嶺下

同治四年

左

劉恩明

系復

陵

單

附録 第二ノ七

茨見山稟 (奉) 老稟

東西寛 三三〇四号

南北長 四三二号

東、茨見山ノ林蔭、蔡家溝ノ界ニ至ル

西、其家墳ニ至ル

南、其家墳ニ至ル

北、茨見山頂上ニ至ル

嘉慶十七年十月廿七日

右稟 王 志 廣 呈 領

陸 軍

附錄百二十七

田家溝案

東西寬 一里十四弓

南北長 九十六弓

東、張山水山其南、

西、張山水山其南、

南、張山水山其南、田家溝、

北、張山水山其南、張山水山、

嘉慶十七年十月十日

右票

赫明 謹復

陸 軍

附録五

就票主李潤、東清鐵道會社ノ契約書譯文

租出契約人 就票主李潤、今官憲ノ諭旨ヲモシテ自己ノ租
先カ讓セシ山手 就票主李潤、今官憲ノ諭旨ヲモシテ自己ノ租
礦務總局ニ租出シテ採炭セシム而シテ損失ニ對スル租價銀
一萬兩ヲ補フリテ明シ其銀ノ數ノ如ク受領セリ租出ノ後、他
人ノ名リテ採炭スルヲ得ス其石炭課税ハ均ク礦務
局ニ上納シ石炭ヲ採掘シ尽ス迄リ以テ期限トス後日証
ナキヲ恐レ契約書ヲ作リテ証トス
光緒二十五年九月初一日

(其他ノ分ニ概シテ同一ニ由リ)

陸 軍

白龍岡石材

龍家屯停車場之距、東北約二里半、寬城子停車場之西、約四里半、鐵道監視家屋、此在、秋守備隊、車方、約三子米突、一多地、俗、山、稱、起、り

一、礦物、種類、性質

石材、石灰、家屋、其他、建築、用、と、採、掘、せ、し、り、如、く、其、種、類、二、種、ア、清、國、人、ハ、石、成、塊、石、ト、稱、ス、カ、石、成、塊、其、質、極、多、堅、硬、ナ、ル、成、塊、石、稱、軟、質、ナ、リ

二、採掘、状況、及、沿革

光緒、二十、四年、頃、清、國、官、憲、（註）、清、國、土、民、之、リ、買、取、し、全、年、の、三、十、五、頃、日、々、平、均、五、百、名、二、十、七、七、頃、日、々、一、子、名、清、國、人、之、使、役、し、採、掘、之、後、事、と、り、上、り、採、掘、ノ、方、法、ハ、掘、削、又、爆、藥、ヲ、用、ヒ、ス、ト、學、之、考、進、ノ、日、古、且、以、テ、是、類、

陸 軍

ナリ、又、鐵、道、線、路、側、ノ、約、三、四、百、米、突、ノ、間、中、五、米、突、道、路、ヲ、築、造、シ、輕、鐵、ヲ、布、設、シ、運、搬、之、ヲ、形、跡、ア、リ

三、現在、状況

該、採、掘、事、業、ハ、一、昨、年、四、月、頃、（註）、之、リ、中、止、し、目、下、其、附、近、ニ、採、掘、せ、し、石、材、堆、積、と、り、又、鐵、道、線、路、附、近、ニ、全、採、掘、と、り

平土門砂金

鑛領ノ東方六十清里ノ西沿岸ニ砂金ノ採取場アリ

沿革及採取場ノ時ノ状況

本砂金場ハ今ナリ距ル僅カニ七八年前土人ノ發見ニ係ルモノ
ニシテ當時ハ金粒既ニ巨大ニシテ最大十数斤ノモノヲ採取セシ
アリト云フ其後兩路國人ノ經營ニ移リテ以來井ヲ穿テ採リ
入レニ丈乃至五丈ノ深新ニ存在セシ金層ヲ採取シ一時
ハ非常ニ隆盛リ極メ餘ノ人夫ヲ使役シテ大々的ニ經營
セシ由ニテ監督官置シテ得ルモノ遂ニ多大ノ損失ヲ招
キ一昨今之レカ採取ノ廢トナリ云フ

陸 軍

昌國寺北炭坑

昌國寺東場ノ北二里ノ丘上ニ有リ其ノ高サ二三百尺ヲ出ス

一 炭質

中生紀層中ニ今在セリモシテ炭質ノ揮發分ニ富ムル
粘結質ノ有烟炭ニシテ硫黄分少ク灰分亦多ク結九
炭ニ打ケルニ堅ク炭ノ中以下ニ過キス既ニテ良好ナリ

二 沿革及採掘當時ノ状況

八九年以前ノ経営ニ創ルル東主人等ノ従事シ来リタルモ
シテ者一二年間永キニ年間ノ採炭ヲ續ケ空気が疎
通不良トナリ多量ノ更ニ新坑ヲ穿テリトテ採炭坑ニ清人
三名ノ所有ナリ由リテ隨所ニ數十ヶ所ヲ穿テ盛ニ採炭ヲ爲シ出
炭額日々七八十噸以上ニ達シタルアリ由リテ湧水ノ多ク大ニ
仍リ中途廢絶ノ後露國人ノ経営ニ移リテ運搬ノ便ヲ
完成シテ規模ノ大炭場備テ移シタル多ク出炭ヲ爲スに至
ラスシテ止ルナリト云フ

陸 單

三道勾石村

昌園停車場ノ東南約一里本三道勾ノ東方山腹ニ在リ

沿革及採掘當時ノ状況

採石場ハ三道勾ノ住人趙某ノ所有地也何等報酬ヲ受

フルヲテ露人土人ハ役使シテ元塔ヲト云フ

石質ハ紅色及暗綠色ノ片麻岩ナリ土人ハ之ヲ琅砢石ト呼ビ

青色琅砢石ハ紅色ノモノヲ堅緻ナリ稱ス採石ハ土民耕作ノ

餘暇ヲ以テ之ヲ營ミ而路人ハ採取器具ヲ貸與セテ云フ石材ノ

用途甚ク廣ク其文公主山領内ノ鐵道及馬仲河昌園河等

ノ架橋ニ供スルモノニ總テ採石場ヲ出テ是レノナリ

陸 軍

北四道溝銀鉛鑛

熊岳城ヲ距ル東北四十浬里餘蓋平縣下北四道溝ノ内黒膝子溝 奈山安ノ腰却ニ在リ

鑛物ノ性質及治法等ハ不明ナルモ日露對峙年前露國人ノ試掘セル形跡アリ其跡跡ハ長サ十間餘寬大尺五寸深サ僅カニ八尺ニ過カサレ居 附近ニ井戸ヲ掘リ家屋ヲ建築セル等アリ見ルニ橋東大ニ採掘ニ從事セルト云ル 計画ナクシテ露國ノ爲メ之ヲ採ル北走ト云ル事實ヲ認ム

陸 軍

大石橋石材

石材採掘場、大石橋停車場東方、今米突盤龍山、西麓より、石、下無、石、蔵す。

性質及治平

石質、粗石、シテ、日、雨、踏、戦、役、前、ハ、雨、踏、園、車、清、鐵、道、人、曹、社、ノ、採、掘、場、ニ、係、リ、開、戦、后、放、棄、シ、ム、ル、事、一、月、營、口、軍、政、署、ニ、於、テ、其、地、沿、岸、波、止、場、及、道、路、修、繕、等、ニ、使、用、ス、ル、者、ノ、停、車、場、ヲ、人、子、山、井、原、ニ、至、ル、間、輕、便、鐵、道、ヲ、布、設、シ、運、搬、ノ、用、ニ、供、シ、中、初、高、人、リ、シ、テ、採、掘、場、ニ、從、車、キ、リ、居、シ、

現在ノ情况

当初、僅カ、日、人、四、名、支、那、苦、力、三、百、名、リ、シ、テ、一、月、約、三、千、万、斤、採、掘、シ、居、リ、シ、七、月、以、降、ハ、使、用、人、少、ク、倍、加、シ、現、在、ハ、一、月、約、二、百、万、斤、採、掘、シ、テ、一、月、約、二、百、万、斤、採、掘、シ、居、リ、

十貨車、搭載し、管口、運搬し居り

双台子石炭

産出地大石橋停車場附近

品質及沿革

品質ハ頗ル良好ニシテ南滿州産出石ノ第一位ニ在リ原料
種モ又實ニ豊富(石灰層ノ面積ハ日本里數ノ約一里
四方ニ達ス)ニシテ規模大ナル從テ多量ノ産出ヲ得ルヲ容
易ナリト云フ此地石灰採取ノ起因ハ其附近ニ居住スル
有力者清人ヨリ開墾得タル地ニヨリ先緒初年ノ設見ニ係リ
當時ハ僅カニ附近土民力自己ノ用途ニ供スル爲メノ規模
ノ製造ニ係リ品質頗ル粗悪ナリタリ日清戦役後外國
人東リテ此地附近ノ石灰層ヲ精査スルモノ有リ土人ハ漸ク其
製造方法ヲ知ル東之ヲ事業ノ擴張ヲ計畫シテア
リト然レテ先緒三年七月日清國本清鐵道沿道ニ守

陸軍

備隊ヲ設置シ專ク之ヲ向ケテ余未嘗テ建築スルニ是ノ石灰
ノ双台子ニアルヲ知リテ之ヲ精査シ龍山林業ニ製造所ヲ設置シ盛
ニ之ヲ精製シ各地ニ建築用ニ供スルニ日清戦役後再
ニ地方清人ノ所有ニ復シタリト云フ

現在ノ状況

日清戦役ノ人名合同ニ従テ人ノ經營セラルリ利用シ製造ニ從
事シ居ルニ産出量亦頗ル明後三年八月及九月及十月及
十一月一ヶ月ノ原料ヲ清人ヨリ買入レ精査山林業ニ於テ全ク
而テ人ノ設計也電ヲ利用シテ規模ノ製造ニ從事ス居ル
而シテ其等製成品ノ大部ハ學口ニ輸送スルヲナスト云フ

萬家嶺 石材

産地、萬家嶺停車場より北十鐘、三哩間、山岳に亘り
四姓、泉溝、孫家屯、天馬子溝、蓋家屯、趙家屯、劉家溝
等、数箇村に跨る

沿革及事業、経営

是の兩端間に、東清鐵道敷設に際し、所有主に交渉を乞ふに
據り、採集するに、本年七月、和邦人若岐信吉、即ち、各地主
ト交渉、正石材買収ノ契約ヲ結ぶ。今月下旬、採集場ニ至り
平し、和邦人、清人、韓人等、石工及人吏、亦多し、但、採
集地より、各地、停車場、構内ニ至る、固、輕便鐵道ヲ敷設し、搬
運ノ便ヲ得し、存し、用、年ハ、造、家、用、鐵道、橋梁、用、及、石、垣
用、等、を、し、其、地、入、念、ニ、重、ニ、鐵道、掘、理、部、外、之、ニ、官、署、有、り
り、而、テ、下、産、類、ハ、石、子、材、四、五、年、間、結、続、可、業、ナ、リ、ト、云、フ

陸軍

文書課

明治三十九年十二月廿七日接覽

別紙

明治三十九年十二月廿六日
同 第四十一號

明治四十年一月九日書送

主任

在法林之使

林之使

在法林之使

在法林之使

南河鉄道 碓氷山調査書送

南河鉄道 碓氷山(西)

外務省

南河鉄道 碓氷山調査書送

南河鉄道 碓氷山調査書送

南河鉄道 碓氷山調査書送

南河鉄道 碓氷山調査書送

大臣



No.

86 (暗)

奉天書 甲午年一月十日 五二五
本署著

次官

の政務

林 外務大臣 萩原總領事

通商

人事

會計

取調

第ハロ号

経信奉四號接順炭坑ノ件ニ突シ趙將軍ハ客
月十九日更シ公文ヲ以テ接順炭坑全体ハ清國
人オウシヨリギョウノ權利ニ歸シタル確的ナル証據
アリ且炭坑ハ青滿州鐵道ノ兩側三十里内外
ニ在リテ東清鐵道会社ハ條約上者然採掘
ニ得ハ中區域外ニ在ル者ヲ然云ヤリ本官ハ右



三十里以内ノ制限ヲ基クホニ突シ將軍座ニ付
取調ヘタルニ光緒二十七八年頃末ニ有、各將
軍ヨリノ^上奏文中ニ屬々右制限ヲ定ムル必要
ヲ述ヘ裁可ヲ得タルコトアリテ黑龍吉林吉
右ニ突シテハ^右法^中細^中取^中調^中ハ招定成立シ居ルカ
ルモ奉天者ニ突シテハ招定成立シ居ルカ
ト確カナル如シ也詳細取調ハ中ナルモ東清鐵
道條約第四條ノ炭坑採掘權ヲ制限シタル
何等指定ノ有否ニ突シテ承知限リテ電檢サ
セ

遺物及凡八種出店ニテ情ニ付石ノ皮取

明治 年 月 日 起 日 發 油



山

主 件

手 記 一 冊

件 辛 酉 年 九 月 十 四 日 附 送 之 七 号 及 付 寄 之 手 文

林 氏

林 氏

林

戸 七 号

昨 年 九 月 十 四 日 附 送 之 七 号 及 付 寄 之

手 文 抄 本 之 送 付 ア ヲ ヲ シ

外 務 省

41.

大臣 菅野 123 (略)

123 (略)

明治二十一年一月十五日 菅野 一二五
菅野 一二五 (?)

林 外務大臣

菅野 一二五

次官

政務

通商

人事

會計

取調

菅野 一二五

菅野 一二五

菅野 一二五 菅野 一二五

外務部ヨリテ重名ヲ本官ニ付シ炭礦百株ニ其
ニ付テ其ノ苦情ヲ探取シ我四美ヲ追テ其
中ニ其ノ及リ就ケハ中央政府トテ天將
軍トシ其ノ四美ヲ一隊セシメコト盛マシキ



義、付右各條中管之上ニテ、中洲令作發
送表ノ探取ニ及リ

42.

明治 年 月 日
日 起 草
日 發 通

次下紙

奉天
松原

林

會
等

時

電送第 七九 號
明治 40 年 1 月 15 日 發 2 時 15 分

テチ子

貴電ハ号未段御申越、初限ニモテ

当省ニ於テモガナクモ材料ナクモ也

外務省

テチ子ノ御返答ニ付、

テチ子ノ御返答ニ付、

東南鉄路合同締結ニ付、

東法並ニ無難、

内務省、

三十七年、

並ニ、

漢文ノ譯文

東清鐵道契約の礦脈ヲ採るルハ
 別に辦法ヲ議スルニ任ズルニテ
 外人ガ
 鐵道附近三十里内ニ於テ炭礦ヲ採
 採るハ明^{其後}文^ヲモツイテ外務部ハ
 二十七年上奏ノ上鐵道附近三十里ヲ
 以テ限トシ並ニ三十里以外ハ何人カ開
 採ルルモ該會社ハ干渉スルヲ得ザルコ
 トヲ明^スル

外務省

談
司
不
得
與
軍

外
務
省

1-1808

明治四十年一月九日

第四號

千山台炭礦ニ関シ趙將軍ヨリ
再應照會ニ関スル件

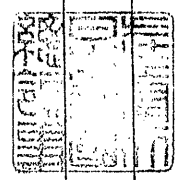
撫順千山台炭礦採掘ヲ停止シ之ガ還
附ヲ受ケタキ趙將軍ヨリ照會アリタル
件ニ関シテハ客年十月廿六日附機密第一
三四号ヲ以テ及上申置候處貴電一三〇号、
御回訓ニ接シ候ニ付其旨直ニ趙將軍、
照覆致置候處更ニ客月十九日附ヲ以テ
別紙寫、通り照會有之目下右照會
ニ對シ不明、個處取亂中、有之候一共
御参考、為メ右照會寫茲ニ供閱覽
在清國奉天日本總領事館

候敬具

明治四十年一月九日

在奉天

總領事萩原守一



外務大臣子爵林董殿

多
少
の
代
り
に
お
し
て
お
し
る
に
よ
り
お
し
る
に
よ
り

44

欽命鑾儀衛副都御史李鴻章奏為

為

照會事照得十月三十日准貴國領事五十一號公文內開
千山台煤礦依貴國政府之意見此煤礦雖不知許可於何
人然事實上數年前已歸俄國經營且為計東清鐵路
之便利從事採掘照日俄及日清條約亦當歸貴國
政府之所有等因准此查該礦向由華商王承堯專
辦實係有案可稽即為真正之事實今貴國政府因
不知為何人許可遂誤認為事實上已歸俄國經營不知
何所根據況中俄合辦之事因貴國共俄國條約之結
果由我國允諾而與貴國合辦者係專指我國共俄國
訂有條約暨立有合同者而言其範圍至明若以與根據
之言證明為俄國所經營不特不足服該商之心即按
之中日議訂東三省條約亦不符合查東三省正約第一

在清國奉天省總領事館

款中國政府將俄國按照日俄和約第五款及第六
款允讓日本國之一切概行允諾復查日俄和約第六
款有屬於為其利益所經營之一切炭礦且以我國政
府之承諾移轉讓渡於日本之文是明明指屬於東
清鐵道附近三十里內且曾由我國認俄國所經營之
礦產確有證據者而言如以華商稟辦之礦混入
我國認俄國獨力經營礦產之內斷難承認又據
中日會議節錄第十節奉省附屬鐵路之礦產
與論已開未開均應妥訂詳細章程是附近鐵路
三十里內之礦產尚不得任意採掘况該礦確在東清
鐵路幹路附近三十里之外更不得以計東清鐵路
利為理由從事採掘統之中俄兩國所訂借地及造路
原約此次東三省正約第二款特聲明實力遵行即為

後乘以毫無根據之事實致生種種爭執起見今特
據約明白解釋以期於條約與所侵越貴國政府果
能實力遵行亦不得否認該礦應在交還之列合再照
會貴國總領事請煩查照各節詳晰回覆貴國政府
平情體察早日答覆并一面仍希貴國總領事轉
飭先行停採以昭公允須至照會者

右照會

大日本駐美總領事萩原

光緒三十三年十一月初三日

在清國奉天日本總領事館

安
目川

譯文

等

定邦譯

新嘉坡總督

趙子長將軍

以昔聊抄原上付陳者十月三十日梅到
之免光臨候了 中五十一号公文

外務省

依之千山名茶礦之業之者吾政府
者乃之誤名礦之何人之許可せしヲ知
ラサルモ能任事官上数年亦已之露
再、酒等之福之且ツ東佐鐵道ノ
便利ヲ計ル為メニ採掘ノ法ヲ也
シテ以テ日露友誼法條約ニ照テ
已亦當サレ者吾政府ノ所為ニ場

不レトハノ趣
 該ノ儀ハ最キニ
 王爾亮ノ
 為ラ
 公文
 貴也政府カ何人ニ
 因テ
 人ノ
 外務省
 此ノ事ハ
 我カ
 此者
 修約
 至テ
 五ノ

誰高心ヲ附スニ是ラ即チ之ヲ決
リ誠ニ海行シ見 在ニ有條約ニ據ス
ルニ亦符合セズ在ニ者ニ治牙一條ニ
依ルニ其法ニ政府ハ其後カ日露
議和條約ヲ多條及チ六條ニ依リ
口由ニ爲シ断爲シ見 一切ノ讓後
ヲ第議スルアリ又其後ニ日露議
和條約ヲ立條ニ其和意ヲ爲スニ經

外務省

考スル所ノ一切ノ名額ニシテ其
政府ノ取議スルヲ ~~其後~~
移轉シテ日本ニ讓後スルノ文アリ是
レ明々ニ在法條道附近三十里内
ニ屬シ且ツ當ニ其地ノ露兵ノ駐營
スル地帯見下ヲ認テ其地ノ地帯

此者言此法為商人カ少額管理
 者確山ヲ^{スレ}我カ^{スレ}露カ^{スレ}招カ^{スレ}認メ
 タ^{スレ}確產ノ内ニ混入^{スレ}スル^{スレ}ハ^{スレ}否^{スレ}シテ
 前認シ難シ又法リ今後歸^{スレ}才十
 年^{スレ}ノ^{スレ}後^{スレ}ノ^{スレ}者^{スレ}ニ^{スレ}於^{スレ}テ^{スレ}鑄^{スレ}造^{スレ}ニ^{スレ}附
 屬^{スレ}ス^レ確^{スレ}產^{スレ}ハ^{スレ}已^{スレ}ニ^{スレ}開^{スレ}採^{スレ}ス^レモ^{スレ}ト^{スレ}置
 塘^{スレ}セ^レん^{スレ}モ^{スレ}ト^{スレ}向^{スレ}ハ^{スレ}不^{スレ}均^{スレ}シ^ク洋^{スレ}河^{スレ}ノ^{スレ}季
 終^{スレ}シ^テ海^{スレ}行^{スレ}ス^レ一^{スレ}シ^クハ^{スレ}是^{スレ}レ^ニ鑄^{スレ}造^{スレ}附^{スレ}近
 三十里内ノ確產^{スレ}モ^{スレ}為^{スレ}ル^{スレ}位^{スレ}ニ^{スレ}採
 掘^{スレ}ス^レル^{スレ}ハ^{スレ}甘^{スレ}モ^{スレ}ニ^{スレ}テ^{スレ}況^{スレ}ニ^{スレ}ヤ^{スレ}後^{スレ}に^{スレ}確^{スレ}產^{スレ}モ^{スレ}是
 確^{スレ}產^{スレ}ニ^{スレ}在^{スレ}法^{スレ}鑄^{スレ}造^{スレ}附^{スレ}近^{スレ}ニ
 十里外^{スレ}ニ^{スレ}在^{スレ}ル^{スレ}モ^{スレ}是^{スレ}レ^ニ在^{スレ}法^{スレ}鑄^{スレ}造^{スレ}ノ^{スレ}便
 利^{スレ}ヲ^{スレ}計^{スレ}ル^{スレ}ハ^{スレ}以^{スレ}テ^{スレ}理^{スレ}由^{スレ}ト^{スレ}ヤ^{スレ}採^{スレ}掘^{スレ}場^{スレ}ハ
 從^{スレ}事^{スレ}ム^{スレ}ル^{スレ}ハ^{スレ}以^{スレ}テ^{スレ}之^{スレ}ヲ^{スレ}要^{スレ}ス^レル^{スレ}ニ^{スレ}法^{スレ}子^{スレ}以^{スレ}苗

外務省

玉河、不統、多、以、程、修、地、及、鍊、道
為、設、之、業、凡、系、路、之、今、回、東、之、者、正
約、才、三、條、之、於、特、之、實、力、通、行、一、不
へ、キ、エ、ト、ラ、部、明、ラ、即、今、後、本、意、也、也
根、據、十、一、年、實、ラ、以、之、種、々、之、事、執、ラ
生、ス、ン、エ、ト、ラ、防、カ、ン、ガ、為、メ、今、特、之、約、之
依、リ、明、白、之、解、釋、シ、以、之、條、約、之、於

外務省

テ、侵、越、ス、ル、所、ナ、キ、ラ、期、ス、貴、島、政、府
果、シ、テ、能、ク、實、力、通、行、セ、ル、亦、應、サ、レ、
該、礦、ヲ、還、付、シ、部、隊、之、入、ル、ナ、キ、ト、認
メ、サ、ル、コ、ト、ハ、サ、ル、ト、シ、
右、部、之、再、ビ、事、務、修、了、シ、テ、以、後、之、及、ト、キ
可、以、之、為、テ、事、務、修、了、シ、テ、調、査、ノ、上、キ、
各、政、府、之、實、務、修、了、シ、テ、公、平、之、以、能

事も成すは四時を以て極限を
一方に手紙を以てヨウ先ノ様
へ停止シ命マシテ申上ル
右明ノ事ハ申上ル所ナシ

(支路三十三号上白紙付)

外務省

機密第二号

機密第二号

手書

要

47

機密 第二号

撫順烟台等ノ炭坑問題ニ関シ請訓件
 撫順炭坑ノ件ニ因リ客年八月三十日付機密送
 第六十一号並ニ九月十四日付機密送第六十七
 號請訓令接到後清國政府ヨリ一度催促
 有之候一其請訓令ノ内容ニ鑑ミルモ我方ヨリ回答
 ナスリ時機ニ非ズト認メ其答ニ差掛キ
 カル處客願末ニ至リ外務部ニ又々別紙厚
 通公ニ文ヲ以テ其當初ノ要求タル千山烟台
 礦ノ還附ヲ追ヒト同時ニ客年八月二十三日付機密
 沖一ノ五号ヲスラ申報致シ烟台炭坑中尾
 明山外ニテ所ノ礦區ニ函スル抗議ヲ繰返シ右
 三礦區ハ南滿鐵道附屬烟台炭坑ノ内混入ス
 ヲカウナルモノニ付東ニ區域ノ劃定ヲ行フ様致度旨
 照會申越ス清國側主張ノ根據ハ
 一、千山炭坑ハ清國商人ノ私有財産ニシテ軍政撤
 廢後、今日ニ於テハ滿洲協約才四條ノ精神ニ
 鑑ミ当然還附セシメヤモノナリ
 二、該炭坑ニ曾テ少額ノ露國資本ヲ入レタルコトアル
 モ外務部ニ之カ裁可ヲ拒ミタリ後テ清露間ノ
 契約ニ依リ兩國ノ合辦ニ屬スル他ノ礦山ト同視ス
 ンカラズ
 三、該礦山ハ鐵道附近三十里外ニ在リテ南滿鐵
 道附屬財産トナスヲ得ズ
 ト云フニアリテ右ノ内清國政府ハ最モ有力ノ主張トシテ

固持セトスルハ三十里主義ニ在ルモノ、如ク今日近外放ク
 部が口頭又ハ書面ニテ毎々表示セテ所殊ニ度明山
 外ニテ所ノ礦區ニ因シ此際改メテ區劃是ノ請求
 ヲ呈出シタルヲ見テモ清國政府ハ鐵道附近礦山ニ
 對スル方針ノ存スル處ヲ推測シ得ヨリト存スルハ先
 二角此種ノ問題ニ因シ清國政府ヲシテ議論上我ノ
 主張ニ屈服シ其要求ヲ擲クニレコトハ到底望ミ
 得ベカクハ所ナリトシテ彼ノ要求ハ近頃益々増大
 ノ傾アルハ趙爾巽が蘇原總領事ニ對シ獨り
 山炭坑ノミナラス撫順炭坑ノ全部ヲ以テ蘇原
 所有ナリト主張スル至レリヲ見テモ知レハリテ傍
 於テハ本問題ニ因シ清國ニ對シ採ル可キ方針ヲ確定シ
 一定明確ノ理由ヲ示シテ彼ノ要求ヲ拒絶シ彼レヲ
 在清國日本公使館
 再ニ論争ヲ裁ヒル無益ナルヲ覺ラシムルハ必也、際會
 々ト思テ致メ抑モ撫順炭坑ニ因シテハ我ニ對シテ
 底彼ノ要求ヲ容ルノ餘地ナキハ今日迄ノ請求示
 ニ依リ明瞭ナル処ニシテ又烟台炭坑ニ因シテモ彼レハ
 回復セトスル礦區ノ價值如何ニ拘ラズ其一部ヲ
 モ清國ニ還附カセカキハ後ニ事變ヲ紛糾ナラシムル
 弊アル可キ勿論自ラ他ノ方面ニモ影響ス可キニ付是
 亦新然彼ノ要求ヲ作リテ之ニ對シテ政府ハ於テモ尤
 其意ヲ察シテ思テ致候要スルニ今日ノ問題ハ清
 國ノ要求ニ對シ幾何ノ考量ヲ興ラシキヤ否ヤニ非
 ズレバ如何ニ理由ヲ示シテ彼レノ要求ヲ作リテ之ニ
 又之ヲ作ケル後我炭礦ノ保有ヲ確立シ其
 經營ヲ円満ニ進行セシムルニ付如何ニ措置ヲ採

本キ歎ノ在ニ在リト思考致候右ノ内第一點ニ因レテハ
 機密差第六一号中ハ明示ノ次第アルモノナリ山東礦
 路ノ管理ニ歸シタルヤ否ヤハ畢竟決然トシテ終ニ
 本キ今回外務部ノ照會ヲ見シモ明ニテ「結局ハ三十
 里主義ノ論」ヲ歸スバリ烟台炭坑ニ因テ彼ノ要
 求ニ至ツラハ無論三十里主義ヲ無視スルニ非ズバシ
 却リルニ由ナシ然レニ三十里主義ニモハハ曾テ清露間ノ
 合意ニテ確認セラルル形迹ナリ聖鴻機ヲ小村男
 子ニ交シタル文書ノ如キ畢竟清國政府限リテ片
 的聲明ニテ露國トノ合意事項ナリト認ムル得ズ
 現ニ滿州鐵道子會議ノ節問題トナリタル炭坑
 ノ如キモ何レモ鐵道線路ヲ去ル五十里清里ノ地ニ
 リト了解ス畢竟清國政府ハ山東鐵道ノ事例
 三 在清國日本領事館
 滿洲ニ準用セラルル云々ト出シタルトニ過ギスト考
 シ夫(萩原總領事)ノ貴大臣宛第八号電報
 益々此點ヲ確カシモノ如シ)假リニ「歩ヲ譲リ清
 露間ノ右様ノ約束成立セラルトモ聖鴻機ヲ小
 村男ニ手交スルニ書クニ「我々」トテ「我」トテ「我」
 云ノ要ナリ鐵道附近ニ於テ採礦權ニ關スル地
 位ニ清露鐵道續約第四條ノ「拒絶」スルモノニ
 シテ我々ハ唯必要ノ場合ニ滿洲州約第十二條ニ
 引山東鐵道ノ利益ニ均等ニ得マキ、此ノ見
 解ニ法理上素ヨリ同然トスル所ナリ且ツ鐵道附
 近ノ礦山ニ對スル我々地位ヲ擁護スルニ此主義ヲ
 固守スル外ナシト認メラシ決ニ付本使ハ先ツ帝國政
 府ハ清國ノ主張スル三十里主義ニ對シテ右ノ見解ヲ維

持るに決せらるるコトヲ希望スルモ、決我根本ノ方針右
 三定ノ上ニ本件清國政府ノ對テ回答ニ於テ此趣旨
 ヲ宣明シ、撫順炭坑ニ執リ、他ノ事實問題ニ因
 る我々方ノ主張ヲ維持シ、滿洲條約第一條ニ於テ清
 國が承認スル露國ノ讓渡ノ露國ノ事實上握有セ
 ル一切ノモノヲ露人が取得スル權利ノ不當ナク、否
 ハ溯リテ之ヲ同ノ必要ナシトノ理論ヲ付スル事勿論ナ
 リ、彼ノ要求ヲ作リ、本件ニ執リ、之ヲ以テ帝國政
 府最後ノ回答ニシテ、態度ニ又、淡アルトモ、尙モ再考
 餘地ナキ旨ヲ宣明スルコト、猶ホ、粵東都督府官制ニ
 關スル清國公使宛貴大臣對下ノ却回答ノ如クシラシムハ
 清國政府素々之ニ満足セザルベキモノカモ、從來ノ如ク
 後ニ抗裁ヲ及覆スル無益ナルヲ知リ、自ラ他ノ時機又
 在清國、本件ニ對シ、
 ハ方法ヲ考量セトスベシト思考致サレハ、斯ノ如ク清國
 政府ニ對シ、折衷ニ最終的解答ヲ致スト同時、炭坑ノ
 原所有者タル清商ニ向テハ、南滿鐵道會社ニテ相當ノ
 金給ヲ與ヘ、其炭坑ニ對シ、關係ヲ放棄セシムル標取計
 ハシメラレトコト必要アリ、有之元來撫順問題ノ張本、趙
 將軍ニシテ、而カモ、張軍サシテ、張曠明目抗裁沙汰
 繰返サシムルハ、原礦主タル王秉堯等ノ苦情嘆願ニ
 外ナラズ、且、實際、同人等ノ事情モ亦、憐レハ、之ヲ
 以テ、彼が、出資ヲ償ヒタル上、多少ノ金錢上ノ満足ヲ得
 ル様ニシテ、一方、烟台炭坑ノ分ニ對シ、テモ、右同様、標ノ午後
 了關係、清國人ノ手ヲ切ラシメ、以テ、先方苦情ノ源ヲ
 塞カニ、所、在、清國政府ニ對シ、最終的解答ト相俟
 シ、本件解決ノ切テ見ルル、今日、於テ、採ルル、方針

右、外無之ト愚考致此荒島ニ凡ニ是賢慮、中ニ此
ト勿論、義ト存ニ本問題、現狀ニ於テ此ト愚考致此
不得策ニ目ツ本使ヲ申使政府ニ與テ此ト愚考
ト地方ニ於テ奉天將軍ニ與テ此ト愚考
有之矣同鄰見ニ對シ何分ノ義電報ニ此ト愚考
様致度決

將又本溪湖炭坑ニ因テ趙將軍ヲ萩原總領事
ニ交渡ノ次第ハ既ニ御兼知ノ如ク此ト愚考
同炭坑ノ保留ヲ必要トセシ軍用トシテ此ト愚考
ノ理由ニヨリ不東清鐵道續約第四條又ハ山東鐵道
ノ附屬ニテ南滿鐵道附屬ノ各義ニテ此ト愚考
ヲ保留スル手放シ執ニ此ト愚考
萩原ト本會ニ照會シ来ル中此ト愚考
ノ趣旨ト併セ御去量ノ上線ノ御方針御前
ニ相成標希望致此ト愚考
明治四十年一月十五日

明治四十年一月十五日

在清
特命全權公使 林 權 助

外務大臣子爵 林 董 殿

此分本信寫ニ萩原總領事ニモ同送致此

機密第二号別紙

照會

欽命全權大臣便宜行事軍機大臣總理外務部事務額慶親王
為照命事本年十一月初一日准奉天將軍文稱案照
職商王承堯承辦奉天千山台煤礦被日軍佔據
開採一案據礦政調查局稟稱日人至今仍未
續開採應請照會駐奉日總領事轉飭停工
等情查中日議訂奉省條約第四款凡佔用之中國
公私各產屬於軍務上無須備用者有在撤兵
以前亦可交還之文現在日本軍隊雖未全撤
軍政早已撤廢即不能援照軍政時代得使用
占領地私產等之慣例仍事採運且該商承

辦之礦既屬奏明奉

旨允准之案即屬華商私有之產業按之約章實
應在交還之類至該商曾添附少數俄股前經大
部咨駁未便立案不得與向由中俄兩國開採
訂有專章既立有合同者相混強認為中俄
合辦之礦任意佔據若認為南滿洲鐵道附屬
之業該礦實在鐵道附近三十里之外即日本一
時認認礦在三十里界綫之內亦不能侵奪原辦
華商開採之利權倘日久不交該商無故受損
實屬擾害商務應請照會

日本駐京大臣約期交還再尾明山張家溝大柵溝
三礦不能混入南滿洲鐵路附屬烟台礦業之內
請附案照會劃清界限等因前來查日人佔據

職商王義堯千山台煤礦久未交還致與中日協約
相背送經本部照會
內田大臣阿部署大臣、並於本年八月十四日、照會
貴大臣轉達
貴國政府迅飭速將此項礦產交還各在案迄
今又兩月有餘、未准見復、茲准前因相應
再行照會
貴大臣查照本部歷次照會轉達
貴國政府轉飭迅速交還免致華商受累、並
將尾明山等處礦產劃清界限、勿再牽混、即
希
見復、為盼、復至照會者、

在清國日本公使館

右 照 會
大日本國欽差全權大臣林

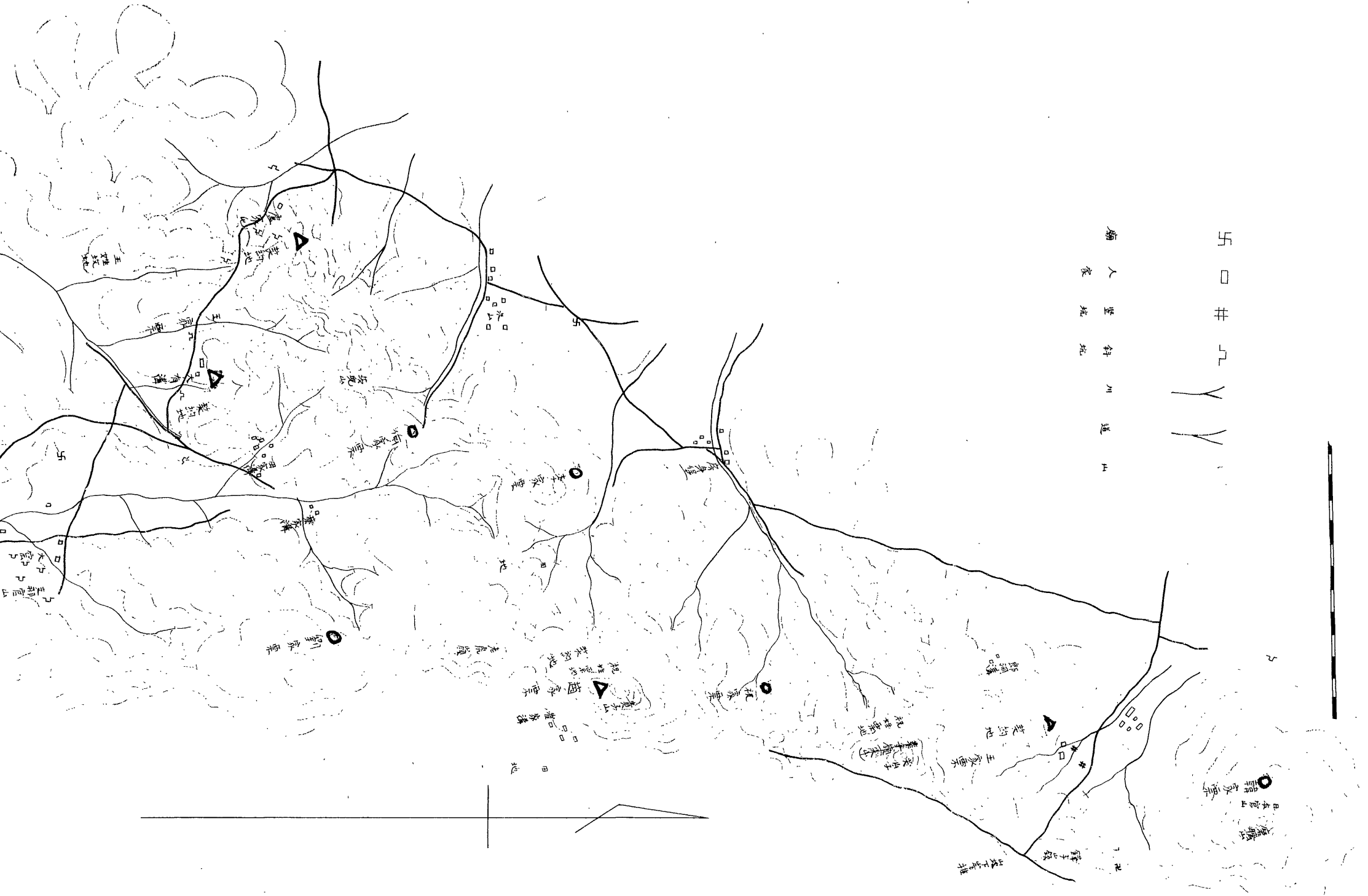
煙臺炭田地形圖

五口井
廟 人 豎 斜 川 道 山
家 址 地



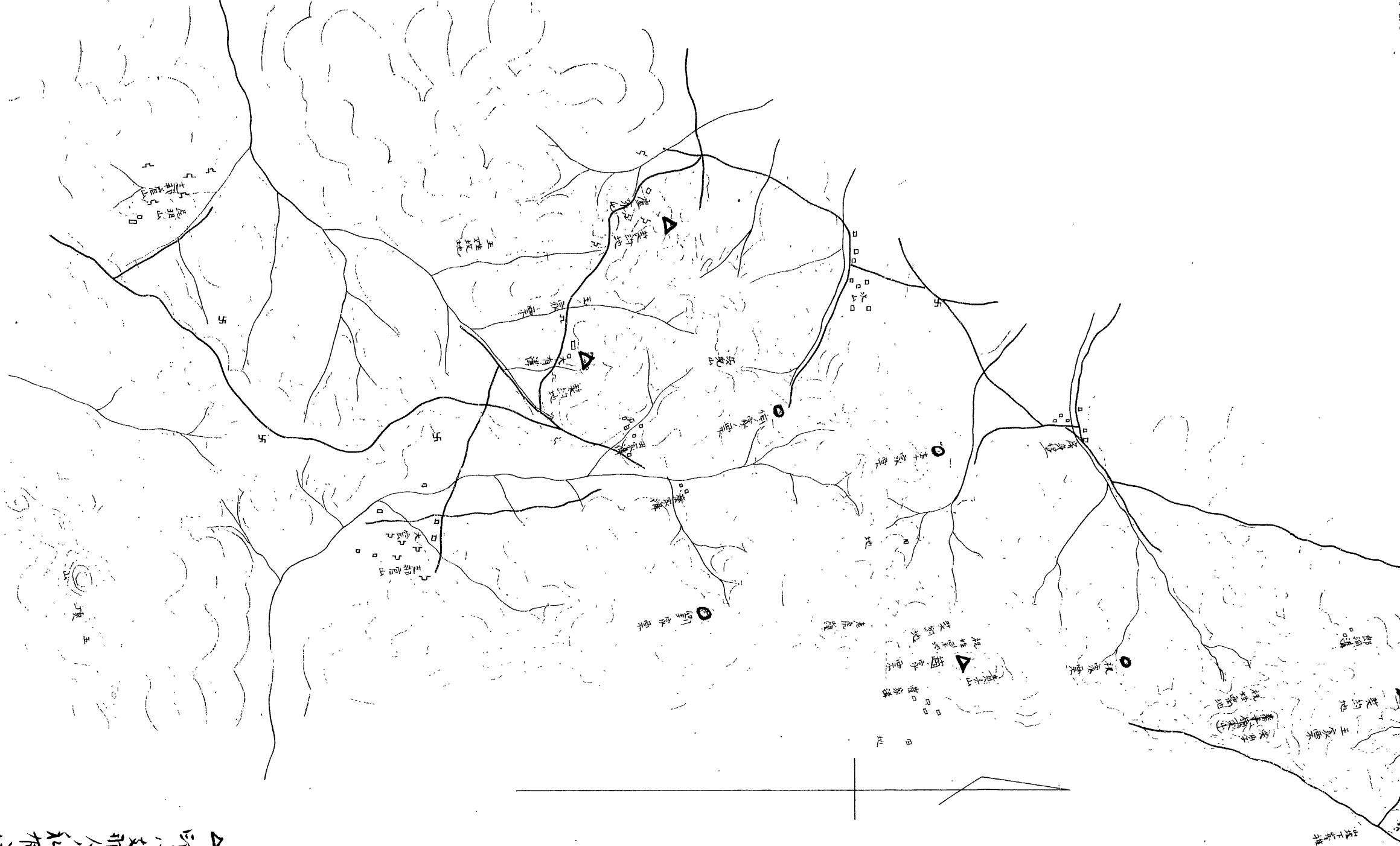
煙臺炭田地形圖

五口井
 廟 人 家 墳 地 針 地 川 道 山



1-1808

○ 碑ニ露跡ヲ實地ニ見ル者
 ▲ 碑ニ支那ノ人ニ有得ル者



寫

抄本

光緒二十七年...

楊名...

楊名...

吳...

...

中外... 礦... 今... 之... 外...

外務省

...

あきあき

機密 第243番

機密第243番

管政務局

出

長

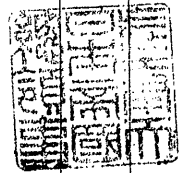
千山台炭鑛ニ関シ鉄道附近三十里
以外ハ開鑛ヲ許サルニ云々ニ関スル文書寫
進達ニ件

撫順千山台炭鑛還附方ニ関シ趙將軍ヨ
リ再應照會有之タル件ハ本月九日附ヲ以テ
照會文寫ヲ添ク及具申候処右照會文中
鉄道附近三十里以外ハ外人ノ開鑛ヲ許サズ
云々ノ文言ハ其憑據スル處不明ナルニ因リ私
信ヲ以テ問合せ置候處右證據トシテ別
紙甲号ノ如キ上奏文寫送リ越候尚將
軍廳ノ條約記録ニ依リ乙号寫則黒龍
江將軍ヨリ意見ヲ上奏シテ裁可ヲ得タル記
録ヲ發見致候ニ付寫取リ候右ハ何レモ他
ヲ拘束スル有効ナル證據ト認メ難ク候ハ
共御参考迄別紙及進達候敬具

明治四十年一月廿二日

在奉天

總領事萩原守一



外務大臣子爵林董殿

馬甲號

外務部奏吉林煤礦應令另
議辦去片光緒三十八年再准軍
機處抄吉林身軍長順奏鐵路
公司議辦煤礦訂立合同一摺光
緒三十七年十月五日奉

硃批外務部知道單併奏欽此查
原奏內稱目下吉林界內鑄軌
已通火車暢行以商民所開煤
尚少難以敷用志欲林木代煤
不特難資經久且將通者林木
悉作大柴亦於地方有損是以
俄統監工其格維志前遣其代
辦達耳爾爾兩來者請在附近地

在清國奉天省木柵嶺軍機處

方開挖煤礦以採林木當以煤
為鑄鐵必需之物不得不允其
開採現與訂立合同十三條彼是
畫押存查等語臣等伏查此項
合同已經盛京將軍與俄監
工接照訂立奏交臣部核復
經臣等以合同第二條所載
路兩旁三十里外之煤礦漫無
限制請將該合同無庸置議
應令與俄監工另議辦去計
三十里為限并聲明三十里以外
無論何人開採煤礦該公司不
得與開採於本日議西復增祺

等摺內請

旨飭軍伏候

命下由臣部咨行吉林將軍一體

遵照辦理謹附片具陳伏乞聖

鑒謹

奏 光緒二十八年四月十二日奉

硃批依議欽此

在清國奉天日本總領事館

馬乙号

黑龍江將軍薩附奏東省鐵路合同第六條
應聲明專指煤礦而言片光緒二十八年
再光緒二十二年七月二十日原訂東省鐵路合
同第六條業經准其開採各礦是東省
礦務係屬該公司已得之權此次商訂
鐵路兩旁開礦章程經奴才督同前
湖南候補道周冕竭力磋商作為專
指煤礦別項礦產不在其內查原訂合
同有開出礦苗處所另議辦法等語
可否請

旨密飭外務部路礦總局於另議開礦
辦法時一律聲明專指煤礦而言藉可
自保利權免致漫無限制惟鐵路兩

在清國奉天

旁三十里開煤礦一節該公司特原訂合
同鐵路附近一語報轉要挾恐其再以吉
江兩省成案又復要挾他處且恐各國復
援鈔取章程別有需索之處皆不得
不預為防範竊慮給奴才考奏西通例凡
外間互立合同若非經國家給予全權
如其開大局均可由政府駁詰更改此次
江省援照吉林與鐵路權讓煤礦草
約應請

敕下全權王大臣等詳加覆核以明妥
是是否有當理合附片密陳伏乞

聖鑒訓示謹

奏 光緒二十八年三月十九日奉

X

在清國奉天日本總領事館

殊批隨金欽此

1-1808